
自治省の悪臣

雪 柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自治省の悪臣

【Nコード】

N9340Z

【作者名】

雪柳

【あらすじ】

ファネ国自治省に新たな政務次官がやって来た！

アギール伯爵令嬢26歳。金茶の髪に黄緑の瞳の美姫。

仕事熱心な若き官僚は日夜苦悩する…名のれば十中八九

「あのアギール家！？」と問い返される日々とうんざり。

何しろ彼女の両親は国内のみならず周辺諸国にまで

名の知られた超・有名カップルなのだ。

伯爵令息であった父と子爵令嬢であった母は幼馴染の許嫁同士。

そのままゆけば周囲から祝福されてゴールインのところ、

時の王女が伯爵令息を熱愛、時の王子が子爵令嬢を偏愛するに至り、まさかの破局の危機。

しかし二人は、王家の完全包囲網を辛くも突破、

隣国まで逃れて駆け落ち婚するという快挙？暴挙？に出た！

これは一方では“世紀のロマンス”ともて囃され（主に平民から）

、他方では“世紀のバカップル”と非難され（主に貴族から）た

鴛鴦夫婦の一粒種の物語。

序章 自治省の新人次官（前書き）

初投稿。

伯爵令嬢、でも庶民育ちのリアンが仕事に、恋愛に、と奮闘する物語。

全10話完結（予定）。

序章 自治省の新人次官

年の暮れ。灰色の空に粉雪舞う、何となく重苦しくて憂鬱な冬の日。

ファネ国自治省では異例の人事が行われた。

一週間前に急死した政務次官に代わる後継者が任命されたのだ。

その人は正午の少し前に、自治省役人一同へお披露目となった。

省内の大会議室には当直や出張中の者を除いた全員が招集された。数は百名ほど。室内が熱気を帯びるのは、混雑のためばかりではない。

誰しもが異例の人事で余所から抜擢された若き官僚に興味津津なのだ…

何しろ新しく来る次官は若い女性、いやそれはともかく、

やって来たのは“あのアギール家の”伯爵令嬢なのだ。

「新任のリアン・パルマローザ・アギール君です。中途半端な時期の

登用となりましたが、政務次官を欠員にしておく訳には

いきませんので、陛下と相談して急ぎ人選しました。

地方役人の経験あり、隣国イサへの留学経験あり、と実力派の方と聞いています。一同、力を合わせ、この自治省を盛り立てて

ください」

優しい口調で、しかし当たりさわりのない紹介をしているのは

自治省

長官キリルである。

まだ三十前であろう若き青年が長官をしているのはその出自ゆえ。

醸し出す雰囲気が高貴で所作の一つ一つが洗練されているのも当然で、

現国王の叔父君にあたる正真正銘の王族出身者だ。今は臣籍に降り、ミルケーネ公爵を襲名している。

しかし、自治省役人にとって目下の関心は長官に対してではない。その傍ら、半歩下がった位置に控えめに立つ人物。

「ただ今、ご紹介にあずかりましたリアンです。地方行政の充実と
基盤

整備に精一杯つとめたいと存じます。

皆さま、どうぞよろしくお願ひ申し上げます」

（あれが…）（あのアギール伯爵令息とあのフェヌイ子爵令嬢の娘…）

（今は亡きリウカ王女を袖にした男の…）

（ワグナ殿下を振り切った女の…）

好奇心むき出しだが、意外に悪意がこもっていないのは、自治省役人の

多くが下級貴族もしくは平民出身であろうからか。

新人次官を迎えるだけにしては熱すぎる視線がリアンに注がれる。

なかなかの美姫…誰もがそう思った。

緊張からであろうか、ぎこちない微笑みを浮かべつつ、

丁寧に頭を下げた新任次官。

伯爵令嬢でありながら黄緑色の瞳には少しも威張った様子がない。金茶の髪はすっきりと頭の後ろで団子状にまとめられている。

王族出身のキリルと並んでも少しも見劣りしない。

黒髪に藍色の瞳をもつ長官とは色彩的に合わないかもしれないが、

美男美女の一对なのは間違いない。

下級役人の何人かは早くも長官と次官のロマンスを妄想した。

しかし、キリルの引き際は早かった。

「それでは後のことはヴァンサランに頼みます」

扉の前に立っていた側近に声をかけ、新人次官に二言三言ばかり何か

囁くと、長官はさっさと大会議室を後にしてしまった。

()(そうだった…)()

あっという間に姿を消した長官に、部下一同は声なき声でつぶやく。

王族出身大貴族が要職につくのは珍しいことではないが、その実、名ばかりのことなのだ。

自治省長官の優雅な、といえは聞こえが良いが、ぐうたらな暮らしぶりは、結構下級役人にまで知られていた。

「それでは皆さんお疲れ、昼飯にしてくれや」

ざっくばらんに声がけすのは、赤毛の大男。官吏というより剣闘士、

という体型だが、立派に自治省役人である。それも事務局長。

長官と政務次官を補佐する高官の一人だ。

「あ、その前に」

新人次官に個別挨拶しようとする者と食堂に向かおうとする者で人の流れができる前に、待ったがかかった。

リアンの手にはいつの間にか紙の束が握られている。

「簡単なアンケートにご協力ください。
お昼前にあまりお引き留めしてもいけないので、制限時間は10分。」

書きあがった方から退出していただいて結構です。
今から私語厳禁ということでスタートしてください」

アンケート用紙があつたという間に配布され、よく見れば筆記用具も会議室の四方に寄せられたテーブルの上に配置されている。
ヴァンサランが何か言いたげな視線を向けてきたが、リアンはそれをさらりと流して、アンケート回収箱を彼に渡した。
変な時期の就任なので、少しでも早く正確な状況認識がしたくて、よろしく願いますね、などとゴニョゴニョ述べながら、新任

次官は

自治省役人一同の間を縫うように歩き回る。

仕事熱心な人なのだ、と一応は好意的に受け止められたものの、アンケートの中身を見るや、その場の大半がビシリと固まることとなった。

熱気を帯びた室内が一転、何やら冷たい汗が背中を伝うのは、十人二十人ではない…実際のところ半数以上だ。

(…(これは))

新人次官の就任直後、アンケートという名の抜き打ちテストが彼らを待っていたのだ。

*** **

吹き
バーンと執務室のテーブルが派手に叩かれた。赤インクのペンが

飛び、書類数枚が絨毯の上をハラハラと舞う。

黄緑色の目を吊り上げ、フルフルと拳を震わすのは、年の暮れに就任

した自治省の新人次官リアンである。

「なんで、こんなに、ド阿呆ばかりなんだっ！」

この役所ってどうなってんの！」

怒りの矛先は自然、補佐官であるヴァンサランに向けられる。

「いや、でもよ、正直どこもこんなもんだぜ…」

俺としては平均正答率47%っていうのは、むしろ

“良くがんばりました”ってトコ。

みんな半分くらいは書けていたってことだろ」

「自治省の役人のくせに、ファネ国16州が全部書けないってどうなの？」

初等教育レベルでしょうに。

でもって長官の趣味を書けという設問に “全国各地の地酒収集”と

回答した人98%。これって正解なの？正解にして良いの？

それから本年度各州に分配される特別予算の総額を書く設問は正答率7%

…ふざけてんの？省内教育ちゃんとやってんの？」

沸々と血圧が上がってくるのが自分でもわかる。

リアンは就任初日から自治省の厳しい現実にさらされることになった。

ファネ国中央官庁の中で、花形官職と言われるのは財務省や内務省であり、自然そちらには権力志向が強い者が集う。

自治省や工部省はどちらかというと地味なイメージだが、

それでも国家予算の振り分けが大きく、地方に与える影響力が絶

大だ。

（その役人がまさかの無能ぞろい？ いや、州の名前全部言えなくても、

特別予算額 知らなくても 政務はできるのか？

いやいやいや、ありえない、落ち着け私）

内心激しく動揺しつつ、リアンは何とか自分を抑えこんで能面を被ろうとした。

目の前のヴァンサランは気さくな人物だが、なんといつても

「長官側」の人間 なのだ。

事前情報としてリアンは彼の養父がミルケーネ公爵の肩書を持つキリルの執事をしていることを突き止めていた。

ここで醜態を見せれば、後で何と長官に報告されるか知れたものではない。

（仕事熱心なものいいけど、ほどほどにね、リアン）

不意に、長官が退出間際に耳打ちした言葉が甦ってきた。

熱い吐息が耳朶にかかり、肩ほどに束ねられた黒髪がほんの少しリアンの頬に触れた、その一瞬。

自分より少しだけ年上と思われる若い長官の何気ない仕草に、ドキリとした。 絶対オモテには出していない自信があるけれど。

（あれって計算してやっているなら結構ヤバイ長官だよな。

でも、計算しないで やっているならもつと面倒な気も…）

就任挨拶のために初めて長官室に足を踏み入れた時、リアンは悟った。

この長官は仕事をする気が全くないのだ、と。

そこは仕事部屋ではなく、大貴族の豪華なサロンのようだったからだ。

そして握手のために差し出された右手は白絹のように白磁のように滑らかで透けるほど美しかった。

(働かない人の手ですね…)と、心の中だけで彼を咎めた。
しかしながら、単なるグータラ大貴族と決めつけるのは早計だ。
リアンはなぜかあの優しそうな雰囲気裏に静かな計算があるよ
うな
気がしてならない。

「で、明日から何か改善策出すんですか、リアン？」
トントンと机の端でアンケート用紙をそろえながら、ヴァンサラ
ンが

声をかける。

礼儀にうるさい連中が周りにいる場合を除いて、
敬称抜きで呼び合うことを二人は初対面の時に決めていた。

リアンの方が上官だが、自治省での経験値はヴァンサランの方が
上だ。

「…そうだな、明日から鬼の政務次官の呼ばれるよう、
務めるようにする」

間違っても“アギール家の伯爵令嬢”などという間抜けな呼称で
はなく、
と言外にリアンは告げた。

序章 自治省の新人次官（後書き）

両親は駆け落ち婚。大ハッピーエンドのその果てに。

一人娘のリアンはイロイロなツケを払わされることになります。

しかしそこは遅しい彼女のこと。

あまり心配せずに暖かく見守ってくだされば何よりです。

第一章 自治省の有閑長官（前書き）

今の時代、こんな長官いたら袋叩きになるでしょうね…

高給取りのくせに、仕事をほとんどしないで遊んでいるのですから。

しかし一方では、こんな優雅な生活をちよっぴり体験してみたいものですよ。

第一章 自治省の有閑長官

ファネ国王都キサラ。

北辺に聳えるカプレス山脈を背負うように王府が築かれている。中央省庁の多くは王府南面にある建物群のに集中している。

自治省は南東門からほど近い旧称カリン宮の東棟に在り、同じ宮の中央棟には商務省、西棟には工部省が入っている。

4階建ての建物の最上階、東棟中央にバルコニーを抱えた豪華な部屋が自治省長官キリルの執務室である。

王族出身、現国王の叔父君、そしてミルケーネ公爵である青年。

彼のために用意された部屋は、工部省長官と商務省長官のそれとは明らかに…誰が見てもそれと分かるほどに、格が違っていた。一応キリル以外の二人の長官室も各棟の最上階に位置しているのだが、その規模はずっと小さい。

自治省長官室にのみ言えること。

調度品の多くは繊細な彫刻が施された黒檀づくり。

寄木細工の床をほとんど隠してしまっているのは、

高山地方の穢れなき乙女が10年以上かけて織るといふ厚手の絨毯。

毎日公爵家から執事が銀器を磨きにくる。

毎日公爵家から専属の庭師が新しい花を活けにくる。

長官のためだけに用意された侍女2名、調理師1名。

…要するに役所の仕事部屋ではなく、大貴族様のサロンなのだ。

「リアン、君の好きなようにしたら良いよ」

ヴァンサランを伴い、朝一番にやって来たリアンに長官はあっさり

承諾の意を示した。

朝一番というのは、キリルが自治省でその日最初に面談した人物という意味で、その実、正午に近い。

リアンは就任二日目にして誰よりも早く来省し、バリバリ仕事をこなしていたが、若き公爵サマは予想を“裏切らず”、重役出勤であった。

「ええと、提案書をきちんとご覧いただけましたか？」

よろしければ本日午後からでも実行に移したいのですが」

昨日のアンケート、もとい、抜き打ちテストと、幹部のみが閲覧できる

人事調書を参考にして、リアンは少しばかり自治省内の組織を動かして

みることにした。

長官に手渡した提案書にはその具体的プランがまとめられている。

一応、キリルは最初の頁から最後の頁までパラパラと目を通した。

1頁、1秒。

それで内容把握ができるなら、あんたはどんだけ天才なんだ、とリアンは心中穏やかではない。

提案書はあっという間に彼女の手に戻ってきた。

末尾に長官のサイン（それだけで芸術のような筆跡！）と

角印（宝石としても十分通用する等級の翡翠製だ！）が付されて。

「さて、少し早いがお昼にしましょうか。リアン、そちらにどうぞ。

サラン、君も一緒に食べよう」

リアンの言葉を待たず、キリルが銀の呼び鈴を一つ鳴らす。

たちまち二人の侍女が現われた。

一礼するや二人は息のあつた所作で中央に置かれた長テーブルに
レース編みのクロスをかけ、銀食器を並べてゆく。
クロスにも銀食器にも公爵家の紋が入っている。
一応、自治省の紋が入った高官用の食器もあるはずなのだが。

（ああ、このお貴族様め〜）

リアンは作り笑いを浮かべるのも嫌になった。
彼女とて貴族出身、まごうかたなきアギール伯爵令嬢である。
しかし、両親が駆け落ち婚をした煽りをもろに喰らい、
その人生のほとんどは庶民暮らしであった。

政務次官就任のために不本意にも貴族の肩書を持ち出す
ことになってしまったが、彼女に伯爵令嬢としての自覚は
皆無である。

（午前中にした仕事書類1件の決裁だけって、どうなのっ）
リアンは目だけでヴァンサラんに問うた。

彼は肩をすくめただけで何も言わない。

キリルは瞳の色に近い藍色の服を好んで着るようだった。
上着はだらしがない…とまではゆかないが、かなりゆったりと
銀系の入った帯で結ばれている。

肩までの黒髪は藍系と銀系を撚った組み紐でまとめられていた。
およそ仕事向きの装束ではないが、王族出身の若様には
よく似合う。しかし見とれている場合ではない。

「長官、せっかくのお誘いですが、就任したばかりでまだ立て
込んでおりますので。昼食会はまた後日にでも。

サラン、行こう」

リアンは不遜にも公爵サマのお誘いを断って踵をかえした。
ヴァンサランは侍女の手にした籠からひよいひよいと
幾つかパンをつまんで抱え込むと、リアンの後を追う。

「リアン」

挨拶もそこそこに、ほとんど逃げるように部屋を出ようとした彼女を
キリルは呼び止めた。

厚手の絨毯が敷かれた床は靴音を消してしまう。

ゆったりと羽織られた上着の衣擦れの音だけが微かに響いて、
あっという間に、長官が目の前に立っていた。

そのまま少し前かがみになるようにして、リアンの目線と同じ高さ
に、
顔を近づけてくる。

(いや〜っ。近い、近い…なんなの、このヒト)

昼の光を浴びて、藍色の瞳が輝く。底知れぬ煌めきを湛えて。
どこまで意識的にやっているのか、まだ読みきれないが、
自分の美貌が女性全般に及ぼす効果を熟知しているに違いない。

「リアン、政務次官として貴女がやるべきと信じることをやりなさい。
い。

でも、約束なさい、仕事のために自分の命を危険にさらさないと」
「は、い、長官」

必死の能面顔も保てなくなり、リアンは何とか返事をした。

「それから、私のことは官職名ではなく、名前で呼んでください。

歳も近いですし、堅苦しいのは抜きにしましょう」

仲良くしましょね、そう小さく付け加え…

何と公爵サマはその白絹の手でリアンの頭を撫でたのである！

(ぎゃああゝやめて、何これ、セクハラ？パワハラ？)

昨夜も今朝も時間なくて、洗髪していないのにーっとうとうでも良いこと

まで思い浮かべて、動揺激しい新米次官。

しかし彼女はすばやく立ち直った。

「長官を名前で呼ぶなど、とんでもございません。

恐れ多いことにごさいます。

それではこれにて、御前失礼いたしますっ」

ヴァンサランがすぐ横でひどく面白そうに若き長官と若き次官を交互に見比べていた。

しかし、リアンにはそんな補佐官の様子に気づく余裕はなかった。

繰り返すが、リアンは庶民育ちである。

18の歳より4年間、地方都市ルーマで下級役人を経験している。

その後、州の奨学金を得て、2年館、隣国イサへ留学している。

つまりは一般的な貴族の箱入り娘に比べれば、人間関係の上で相当鍛えられているのだ。

男女の関係もそれなりに…まあ、豊かとは言えないものの、

深窓の姫君に比べればずっと経験値があるはずだ。

王族出身とはいえ、身にまとう高貴さに中てられたとはいえ、
ぐうたら長官にドキドキするはずなど、断じてないのだ！

「サラン、長官っていつもああなの？」

ヴァンサランが長官室から要領よく持ち出したパンを受け取ると、
白いハンカチで包んで袋状にして、階下に運ぶ。

昼食をとりに行く時間がほとんどないのを察したのか、赤毛の大男は意外によく気のつく、優秀な補佐官である。

「ああって？」

「…天然タラシ」

「お姫さまが使う言葉じゃねーな」

「お姫さまじゃないから、私。知っていると思うけど」

「長官はどちらかというと女嫌い、いいや、人間嫌いな方だと
思うよ…」

どう説明したらいいのか、ヴァンサランは困った。

別に口止めされているわけではないのだが、リアンのことを
相当気にかけていることを今この時点で言うべきかどうか。

キリルがリアンに対したこの二日間。

ヴァンサランを補佐官として直近の部下に配したこと。

自分から手を差し出してまで、リアンと握手したこと。

耳朶に唇が触れそうなほど近づいて、何か囁いたこと。

官職名ではなく、名前で呼ぶように頼んだこと。

危ないことはすると言って、頭を撫でたこと。

一見すると何気ない言動のようで、しかし、だ。

長官の本性をよく知るヴァルサランにとっては、そのどれ一つを
とつても「ありえね〜」「誰だこいつ〜」という事態である。

実はあの人、いろいろ難しい人なんですよ〜気を付けてくださいね、
と正直に警告するわけにもいかず、ヴァンサランは口をつぐんだ。
それを見て、リアンは、やっぱり彼は「長官側の人」だ、と思い
パンの一件で下げられた警戒度数をまた少し戻すことにした。

(負けるな、私…)
階下の自室に向かってリアンは走った。

*** **

午後の優雅なひととき。

自治省長官は客人と差し向かいに座って、香茶を飲んでいた。
場所は、中央バルコニーに設けられたサンルーム。
ミルケーネ公爵と彼の迎える客人にのみ許された特別な場所である。

「例の娘がめでたく自治省に就任したそうだな。
中央での業績皆無の者を 政務次官にとは、また思い切ったこと
を。」

陛下の弱みを何かつかんで、取引したのか」
客人は口髭をはやした中年の紳士である。
キリルと同じ癖のない黒髪は短く切りそろえられている。
やはり同じ藍色の瞳はしかし、ぐっと鋭く威圧的ですからある。
そして王府内でも帯剣を許されているのは、この男が軍人である証
だ。

「…人聞きの悪い。きちんと仕事ができると思ったからこそ抜擢
したのでですよ」

「ふん、田舎でちよつとばかり役人をやっただけで、人を動かせる
ようになるものか。留学経験だって高が知れている」
「そういう貴方だって、数年前から突然、女性官吏の登用やら
女性の爵位継承やらに積極的にになりましたよね」

…誰か、王府に呼びたい女性でもいたのですか、キリルの目はそう
問いかけている。

「私を出し抜いて、あの娘を困いこんだつもりか…公爵」
「とんでもありません。私はただ、私の“可愛い人”がこの王府で

「どれだけ自分を通せるのか見てみたいと思っただけですよ」
そのためになんかお膳だてしただけです、とキリルはいたずらをした
子どものような顔をした。それを見て客人は苦笑する。

「お会いになりますか？ここにお呼びしてもいいですよ」
「いらん。会いたい時は自分で会いに行く。お前の指図も受けん」

客人は大げさなことを嫌い、非常用の隠し通路を使って
自治省長官室を訪ねていた。

したがって、彼の来訪をリアンを含む階下の人間は誰も知らない。

「先ほど、隠し窓から少しばかり観察させもらった。

政務次官付の数名を凄い勢いで叱り飛ばしていたぞ

…あれはとんでもないジャジャ馬だな」

「とかく地味な自治省もここに来て活気づきそうですね」

「黄緑の、ペリドットの瞳が…“あの人”と一緒にだった」

客人から遠い昔を懐かしむ、愛おしくも切なくなるような声が漏れ
た。

キリルは香茶を口に含むふりをして、しばし沈黙する。

相手が「あの人」のことを語り始めたら下手に追及してはならない

…過去から学んだ教訓だ。

「だが、金茶のくせ毛はあの男譲りか。

気に食わないな、どうしてくれようか」

客人の表情が一転、憎しみの色が暗く激しく浮かび上がる。

腰に佩いた剣で金茶の髪を首ごと落としかねない勢いだ。

しかし、彼にあの娘は殺せない…キリルはそう確信している。

「殿下、私の“可愛い人”をいじめるのも大概にしてくださいね」

「お前の指図は受けんと言っているだろう。」

第一、お前のモノじゃない」

「さて、私たちは敵同士ではないはずなんですがね」

…ここでいがみあうのは得策ではないですよ。

客人の空になったカップに手ずから香茶を注ぎながら、
自治省長官は心とろかすような笑みを浮かべた。

第一章 自治省の有閑長官（後書き）

キリル長官の“可愛い人”と客人の“あの人”。なんかビミョーです。

客人が何者かは第3章で出てきます。ひげ面軍人のおっさんですが、準主役級の方です。

ちなみに二人が飲んでいた「香茶」は紅茶に数種の薔薇の花びらを合わせた

公爵家オリジナル・ブレンドです。もちろん茶畑も薔薇園も領地にあります。

第二章 自治省の美貌小姑 その1（前書き）

年の代わる前に何とか更新を…

急いでうどんを食べて（我が家はなぜかそばではなくうどん）、年内すべりこみを目指しました。

が、アギール家ほのぼの話を挿入したらちょっと長くなってしまいましたので

2回にわけます。

第二章 自治省の美貌小姑 その1

自治省政務次官の朝は早い。日が昇る前に起床して、身支度を始める。

就任して一週間が経つが、まだ一度も王都内にあるアギールの屋敷に帰っていない。

祖父であるアギール伯ハリドと叔父にあたるシャイン子爵クロンには「ごめーん、一カ月は帰らないから許してね」と先に謝つてある。

二人は年末年始をリアンと過ごせないことを、とても、とても残念がり…

「おじいちゃんと一緒にジャオズを食べてくれないなんて」

「おじちゃんと一緒にシヨウコ酒を飲んでくれないなんて」

と終いには泣き落としにかかったが、リアンの心は変わらなかった。

ちなみに、ジャオズというのは、小麦粉をこねたものに肉野菜を包んで

蒸した料理だ。

リアンが隣国イサに留学していた時に習ったもので、

なんでも極東にある一大帝国の名物料理、特に正月に好んで食されるもの

らしい。

シヨウコ酒というのも同じ国の特産で、琥珀色をして芳醇な酒だ。

隣国イサはファネ国以上の国際都市で、リアンは滞在2年の間に随分と

世界の美酒美食を堪能した…もっとも大衆料理・安酒限定であったが。

王都に来たばかりの頃、「おじいちゃんに」に手ずからジャオズを作って

ご馳走したら、大変なことになった。

長く離れ離れに暮らしていた孫娘の心づくしに祖父ハリドはいたく感動し、

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、ジャオズを頬張ったのだ。

その後すぐ盛大にむせて、さらに騒ぎが大きくなった。

庶民暮らしで自活能力が備わったリアンを逆に不憫がり、祖父も叔父も

とことん彼女に甘かった…嬉しい反面、過剰な家族愛はちょっと面倒くさい。

くれぐれも役所に顔を出してくれるなど釘を刺しておいたが、いつまで保つか。

直接出向かぬ代わりとばかり、日に三度、やれ弁当だ、菓子だ、着替えだと

召使いに差し入れを届けさせている。

(どこの令嬢だよ…あ、伯爵令嬢なんだっけ)

というボケとツッコミをリアンは一日数回脳内で展開している。

実はファネ国の中央官庁は4日間の冬季一斉休業に入っていた。

大晦日と正月三日はどの役所もお休みで、緊急事態に対応するための当直がごく数名日替わりで詰めているほかは、どこも閑散としている。

自治省にしても通常であれば150名ほどいる人員が、休業期間中は二割に満たない。

リアンは政務次官として休暇中であっても

“非常時に直ちに駆けつけられる場所”にすることを求められるが、省内にずっと詰めていなければなるぬ義務はない。

本来は王都内にあるアギール伯邸に待機していれば十分なのである。

何しろ、アギール伯邸と王府はそう離れていない。

徒歩であれば1時間以上かかってしまっただろうが、車を使えば10数分で済む。

近距離にもかかわらず、祖父と叔父の懇願を蹴ってまで自治省に居座るリアン。

…「地方行政の充実と基盤整備に精一杯つとめたいと存じます」
就任演説で述べた言葉は嘘ではない。

彼女は省内に設けられた参考資料室と自分の執務室を行ったり来たりしながら、猛烈な勢いで過去の報告書を頭に叩き込んでいた。

一朝一夕で何がどうなるというものではない。

けれども、ファネ16州が全部言えないような自治省役人がありえないように、

省内の仕事がどう回っているか知らない政務次官というのもありえない。

…まあ約1名、何もしないのが仕事と豪語しそうな上役がいるにはいるが。

ひと気のない役所で、だからリアンは少しでも役職に相応しい人物になろうと

独り努力する。

…それともう一つ。リアンが何とか解きたいと思っている謎。

(私を政務次官に任命したのは一体誰…?)

26歳の…貴族としては行き遅れの女。

地方都市でたかが4年、下級役人をやっただけの隣国イサにただか2年、留学してただけの。

“世紀のロマンス”カップルの娘だからどうだというのだ。いきなり中央官庁の一つで、長官に次ぐナンバー2なんてありえない。

（そんな無茶な人事がなぜ通った？誰が賛同した？何のために？）

リアンが地方都市ルーマで下級役人をするようになった頃から度々せめて彼女だけでも王都に戻ってくるよう、親戚一同から懇願されていた。

2年前に、とある悲劇が彼女を襲って以後は、その声がますます大きくなった。

しかし、彼女が最終的に折れたのは、祖父の、

（自治省に欠員が出たようだよ…少し中央で働いてみないかい？）という誘いだった。

その時は、下級職だと思っていたのだが。

来省初日にキリル長官から手渡されたのは「政務次官」の記章。

祖父はたぶん騙された。リアンは何かウラがあると感じつつ、この話に乗った。

どんなウラがあるうと。

（私は私のやるべきと思うことをやるだけなのだから…）

始まりの月、三の日。官公庁仕事始めを明日に控えて。

政務次官の執務室を書類の山で埋めながら、リアンは苛々し始めていた。

彼女が本当に見たいと思うものは出てこない。自由に動ける時間は

残り少ないのに。

そこに躊躇いがちに扉を叩く音がする。

就任数日目にして、新人次官は早くも自治省の過半数から恐れられるよう

になっていた。

「次官殿、お客さまです…」

運悪く本日の当直となった役人が、おずおず顔を出すや来客を告げた。

「この時期に…?」

冬季休業期間中である。緊急時ではない限り、客は来ないはずだが。

「シヤララ王妃の女官が書状を持ってお見えになっています」

「王妃様の…?」

伯爵令嬢とはいえ、26年間の人生の中、王族との接触は皆無であった。

しかし、王妃付き女官という一点でリアンの脳裏に閃くものがある。

叔父クロンの警告。

自治省就任するや時をおかずに現れるであろう要注意人物が二名いることを予め告げられていた。

その内の一人が王妃付きの女官。

「どなた…?」

なにくわぬ顔で問いながら、リアンの頭の中にはすでに相手の名前が浮かび

上がっていた。

「フツサル伯爵夫人フローネさ…」

「…わたくしをいつまで待たせるつもりなのっ!」

当直役人が言い終える前に、派手に扉が開け放たれる。
現れたのは正統派美女。

波うつは金の髪。薄紫の瞳。白磁の肌。桜色の爪。
唇には珊瑚色の口紅が乗せられているが、化粧自体はごく控えめ。
それは逆に化粧をする必要のない美貌ゆえ。

女官にはそれぞれ仕える主人と官位に応じて定められた制服があるが
本日は私服にてご登場。

濃紫の絹地にふんだんに金糸を施した

…恐ろしく派手なドレスを「自然に」着こなしてしまっている。

(出たな要注意人物その1…)

そんな内心を綺麗に隠し、リアンは右手を胸に当てて、正式な礼を
とった。

官位は政務次官の方が上だが、王妃様の書状を携えた女官に対して
礼を

欠いてはならない。そのまま、上座の席に案内する。

当直役人は役目を果たすやあっという間にいなくなった。

女官が腰を下ろすと、リアンも真向いに坐した。

睨みつけるようなヴァイオレットの瞳に感情を消したペリドットの
瞳が
ぶつかる。

「…わたくしのことは、どうせあのしみったれ伯爵やくだらない子
爵から

聞きおよんでいるでしょう」

「…どなたのことを仰っているのか分かりかねますが、シャララ王

妃様付き

女官の一人にフツサール伯爵夫人フローネ様という方がいらっしやる

ことは聞き及んでいます。

むろん母君が国王陛下の姉君にあたるということも」

リウカ王女。

リアンの父クロスを派手に追いかけて回し、時の権力を振りかざして母ミアンとの中を裂こうとした張本人。

しかし、非難めいたことは一切口にしない。既に亡き御方であるゆえ。

リアンの父母が駆け落ち婚した後、王女は前国王の命令で降嫁したが、フローネを生んで一年も経たない内に没している。

「狡賢いアギール伯爵と卑怯なシャイン子爵に、あることないことどうせ吹き込まれているでしょう。田舎育ちの娘が、いやらしいこと」

「…王妃様の書状をお渡しいただけますか」
あからさまな敵意を完全無視して、リアンは相手に本来の用件を思い出させる。

いや、フローネ自身の目的は分かっている。リアンへの宣戦布告だ。王妃の書状など口実に過ぎない。

「わたくしの話聞いてるのっ！」

「フツサール伯爵夫人」

この無礼者、とばかり椅子を蹴って立ち上がった女官に時を同じくして

リアンの容赦ない声が飛ぶ。

「私にはしみつたれで狡賢い祖父も、くだらなくて卑怯な叔父もい

ません」

「身内の鬮^{ひこぎ}目と言うわけかしら」

「そうかもしれないません。ずっと離れて暮らしていましたが“私たちは”」

仲良し家族なので」

言ってしまったから、地雷を踏んだかな、と少しばかり後悔する。

案の定、フローネの薔薇色の頬が色を失った。唇がきつく噛みしめられる。

“私たちは”という部分を特別強調したつもりはない。

しかし、「貴女たちの家族とは違って」という意味にとられたことは明白だ。

「本日の3時、王妃様が非公式のお茶会を開かれます。

政務次官殿をお招きしたいとのことですので、刻限までにエリエ宮を

訪れますように」

凍るような声でフローネはそれだけ述べると、王妃の書状を卓の向こうから

こちら側に滑らせるように寄越した。

本来は手ずから渡すのが礼儀だがリアンは咎めなかった。

リアンが書状の封印を解いて中身を確認する前に、フローネは執務室から

姿を消した。登場と同様、退場も慌ただしい。

(何か：勝っちゃった?)

初対面でガチンコ対決をする気は毛頭なかったのに、やはり身内を悪く

言われて少しばかり毒を吐いてしまったらしい。

リアンはこの後に控えている“非公式のお茶会”とやらに思いめぐらして憂鬱になった。

残念ながら、お断りするという選択肢はない。

上司との昼食会は回避できても、これは断れない。

フローネもそれを分かっただけで、リアンの都合を一切聞いてこなかった。

(端的に述べると、煩い、邪魔、面倒、時間の浪費、という感じがな)

叔父クロンの人物評が甦る。

確かにフローネの登場で、午後の貴重な数時間が潰れることになった。

王妃様とお茶？恐れ多いことながら、当日いきなりとは本当に煩わしい。

(…でもあれで、本質は邪悪じゃないからさ。

まあ、お姫様のストレス解消と思っただけ、時々相手してやってよ) 叔父は前半で酷評しながら、何のつもりか後半でフォローした。

(確かに…分かりやすい。あれだけ「お前が嫌い」というのを正面から

ぶつけられると、いつそ清々(さすが)しいと言っただけ) ウラがなくてかえって憎めない)

フローネが聞いたなら、地獄の釜が開くほど激怒しそうなことをリアンは悠長に考えていた。

*** **

その日の午後。

一応アイロンのかかっている礼装用の上着に改め、髪をまとめ直し、化粧を薄くのせて、リアンは訪問準備を整えた。手にはこころばかりの贈り物を携えている。

いざ出陣、と覚悟を決めて、執務室の扉を開けたその時。

黒髪を肩に揺らし、袖も裾も長い神代の装束をまとった貴人が目の前に立っていた。

「…その恰好で行くの？」

藍色の瞳がリアンを覗き込んだ。

(…その恰好で行くんですか？)

同じ台詞を心の中だけで返した。

リアンの前に贅を尽くした衣装で現れたのはもちろん、ミルケーネ公爵。

自治省長官キリルであった。

第二章 自治省の美貌小姑 その1（後書き）

次回キリルが活躍…はともかく、ファネ国王家の人物関係が少し明らかになります。

キリルとリアンの距離は…なかなか縮まりませんね、ごめんなさい。

その2は元旦から更新予定。がんばります。

第二章 自治省の美貌小姑 その2（前書き）

新年明けましておめでとございます。

予告通り、何とか元旦に更新できました。やれやれ。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

第二章 自治省の美貌小姑 その2

ワタシの常識は世界の常識ではない、かもしれない。
ファネ王国の常識はイサ共和国の常識とは一致しない。
留学時代にそれを実感することしばしば。

しかしそれ以前に…同じファネ国人であっても。
ワタシとこの公爵様の常識は全然違う、のかもしれない。

「ええと、長官？長官も王妃様のお茶会に？」

「…誰が貴女を王妃様に紹介すると思っただのですか」

いや、冬季休業期間中なんですけど。非公式茶会なんですけど。
そして何より、今朝突然呼び出されたんですけど？

要注意人物その1の伯爵夫人に。

そういえば、胸も尻も立派だったな…と一瞬、リアンは現実逃避。

「新年を祝う晴れ着を何か持っていないのですか？」

「…そんなありませんよ」

間合いを詰めてくるキリルが怖いわけではないのだが、
何となく一步後退。ああ、見ているのが恥ずかしい。

似合ってますよ、似合ってますけど。

貴方は、ファネ神話に出てくる

月の神ですか、氷の神ですか、鏡の神ですか。

首に架けられているのは重そうなサファイヤ、鎖は白金。ブリタナ

白絹の手と藍の袖の間は何やらキラキラ輝いて…水晶ですか、それ。
長官殿、貴方のお召し物と装飾品は今一体お幾らですか？

「ハリドやクロンが伯爵邸に何枚でもドレスを用意していそうですが」

「…就任以来、帰っていませんので。それに、当日の呼び出しで、非公式茶会に、“次官”が着飾ってゆくのはおかしい話です」

「…貴女はそう考えるのですね。まあ良いでしょう」

行きますよ、ミルケーネ公爵が身を翻すと、ふわりと香の匂いが微かに

聞こえた。

シダー系の常緑樹の香り。甘くない。嫌味じゃない。

冬の森の清浄な空気。

てつきり自治省の在る旧カリン宮・正面玄関から出て、中央道を北進し、

王妃のおはしますエリ工宮に向かうのかと思っていたら、

キリルが足を踏み入れたのは地下通路であった。

（これって、王族と一部の長官クラスしか使えない、というか、

知らない通路なんじゃ？）

曲がりくねった通路は幾度も幾重にも枝分かれしている。

一定間隔に灯りが置かれていて視界はきくものの、案内板のようなものは全くない。

何度か曲がる内にリアンは方向がわからなくなった。

外に出なくて良い分、雪にも氷にも晒されず、コート不要で快適。

そしてたぶん、エリ工宮までの最短ルートで進んでいる。

いちいち門衛に誰何され、その度に用向きを説明する煩わしさもない。

随分と、茶会に行くための手間が軽減されている。

(これは長官に感謝しなければいけない所なのだろうけど…)

一定距離を保とうとするあまり、地下道で見失いそうになったところ、

戻って来たキリルに腕をつかまれた。

そのまま小さな子どものように手をひかれたまま、会話らしい会話もなく

目的地に向かう。

(何か気まずいよ、空気重いよ、帰りたいたいよ)

能面を被る努力をしつつ、傍らの麗人をちらりと見やれば、相手はなぜか

機嫌良さそうだ。王妃様の茶会が楽しみなのだろうか。

「ここからエリエ宮ですよ」

重たい石造りの門を押し開けば、眼前には螺旋階段が伸びている。

「あと少しです」

ぐるぐると、3階分だか4階分だかを上った頃に、長官がまた声をかける。

体力的には自信のあるリアンだが、ここまでで何とというか、精神的に疲労した。もうお茶会やめて帰りたい。

キリルの足が止まった。彫刻が施された櫺の扉の向こうから眩い光が漏れている。この向こうはもう、エリエ宮の“表”だ。

「少しお待ちなさい」

キリルの手がリアンから離れたが、ほっとする間もなかった。

そのまま首の後ろに手が伸びて、あっというまもなく金茶の髪をほどかれてしまう。

「衣服はともかく、あまりガチガチなのも野暮ですよ」

「…田舎者ですので、お構いなく」

一応反論したが、長官は聞き入れず、金茶の髪を背中に流すように手で梳くと、今度は両横の髪だけをすくって軽く編みこみ、懐から出した

髪飾りで留める。この間、ものの1分もかかっていない。

「よくお似合いですよ」

そう言われても鏡がないのでよく分からない。

手で触れてみて、なんとなく編みこみと髪飾りを感じるだけだ。

「長官：なにか手馴れていらっしやいますね」

「…まあ、年齢問わず女性のお相手をするのは慣れていきますので」

今サラリと凄いことを言った。

リアンはどう言葉を返してよいか分からない。

しかも「年齢問わず」ってナニ？

「行きますよ」

キリルが扉を開く。眩い光に包まれて、リアンは目を伏せた。

*** **

案内された部屋はさほど広くない客間であった。

エリ工宮の中で王妃がごく私的な内輪の催しを行う際に使用する小サロンのようだ。

橙色の壁には金色の格子模様が入っているが、けして派手ではなく落ち着いた趣を醸し出している。心地よい暖かさが室内を包む。

そこかしこに王妃の趣味の良さと気配りが感じられた。

「お会いできて嬉しいわ、リアンさん」

絹張りの長椅子に腰掛けるや、王妃は新任の政務次官に向かって気さくに

声をかけた。それからちらりとリアンの傍らに目を走らす。

「公爵：貴方もいらしたの。新年のお客様で忙しいでしょうに。」

心配しなくても新任次官を苛めたりしませんよ」

その言葉で、キリルが王妃の非公式茶会に招待されていなかったことを

リアンは知る。

（そういえばミルケーネ公爵：大貴族様のお屋敷って正月三が日の間は

新年祝賀の来客がひっきりなしで、応対に多忙を極めるんじゃないかな？）

神代の衣装も突然の非公式茶会のためではなく、公爵家参賀の返礼用と考え

ればうなずける。どう見ても公爵の方が、王妃より豪華な装いだ。

王妃シャララは襟元までしっかり止まったブラウスと踝くるぶしまである長いスカートというシンプルな出で立ち。

ただし、ブラウスには流行の花鳥文様手編みレースが胸元と袖にたっぷりあしらわれ、ルビーのブローチがアクセントになっている。

「リアン・パルマローザ・アギール伯爵令嬢を王妃様に紹介するのに上司である私が出向かないわけにはいかないでしょう」

（いや、誰も頼んでいないんですけど…）

しかし、グウタラ長官だと思っていたが、意外に面倒見が良いのか？リアンは就任初日に行った、抜き打ちテスト、もとい、アンケートの回答内容をおぼろに思い出した。長官の趣味は“全国各地の地酒収集”。

（今度、就任挨拶と新年挨拶を兼ねて一本持参するか…）

自身はとりたてて酒飲みではないリアンである。

ただ、留学時代に入手した

美酒を若干手元に保存していた…それほど高価なものはないのだが。

その時、強い視線を感じてリアンは慌てて挨拶のために口を開いた。王妃の後ろで女官の一人が睨んでいる。言わずと知れたフローネである。

「この度、自治省政務次官を拝命しましたリアンと申します。」

王妃様にお目にかかれて光栄に存じます。」

正直なところ、挨拶を済ませ、茶の一杯も飲み干したらさっさと執務室に

戻りたいのが本音なのだが。

王妃様は悪い方ではない。それどころか偉ぶらず、思いやりのある貴婦人の

ように見受けられる。その女官の方がよっぽど態度がデカかった。

しかし、新人次官のリアンはここでいつまでも油を売っている暇はないのだ。

明日から自治省の仕事が本格スタートしてしまうというのに！

王妃が手ずから入れた花茶を、リアンとキリルはご馳走になった。

貴人がふるまう名茶をいただけるのは臣下の誉れ^{ほま}。

茶会の正式な作法は一通り母ミアンに習ってはいた。

が、あまり興味もなかったので、リアンには今、自分が喫した花茶がどのような由緒のもとか皆自分からない。

隣のミルクケーキ公爵、元王族出身の彼は一口で分かったが、わざわざ部下に説明するようなことはしない。

ただ、その茶を王妃がリアンに出したという事実により一人満足していた。

「大層香り高い、美味しいお茶をありがとうございました。」

私もここに心ばかりのものをお持ちいたしました。」

(さあ、ここからが一勝負)

リアンは持参した包みを解いて、青磁の小さな壺を卓の上に置いた。「田舎育ちゆえ、不調法をお許しください。わたくしが昔、母から学んだ

ことを間違つて記憶していなければ、返礼として客も持参した茶を入れて

差し上げる習わしとか…お許しただけですか」

「王妃様！外からの物を軽々に口にしてはなりませんわっ！」
たちまちフローネが血相を変えて、飛び出してきた。

早速、リアンを毒殺犯扱いだ。

「これは失礼しました。ご無礼をお許しください。それではこれは持ち帰ります」

(ま、当然だろうな…)

リアンは大人しく引き下がろうとした。

王家にとってアギール家の存在は苦々しいものだ。

何せリアンの父を追いかけた王女は若くして亡くなり、

リアンの母を追いかけた王子は生涯独身を貫く宣言をしている。

王女は現国王の姉にあたり、王子は弟にあたる。

国王陛下にあらせられては、お二人の間で気苦労が多かったことである。王妃様にあらせられても、また然り。

「折角、アギール伯令嬢が持参してくれたのだ。いただくのではないか」

ここが潮時と、御前を辞すために立ち上がったリアンを制止する声が響く。

王妃の座す背後の扉(恐らく別の隠し扉)から新たに現われた人物。これほど近距離で対面することは初めてだが、ファネ国の者であれば

誰も知るその姿。

ファネ国第12代国王ソランサその人であった。

(何か王様まで出てきちゃったよ…)

青磁の壺を両手に持ったまま、リアンは深く頭こぶを垂れた。

ソランサ王はミルケーネ公爵と身にまとう色彩がよく似ていた。くせのない黒髪。キリルに比べるとぐっと短く切りそろえているが。藍色の双眸。しかし、キリルに比べると少し、明るい色合いが。

御年43歳。

ミルケーネ公爵が中年になったらこんな感じになるのかと想像して、リアンは我に返る。恐れ多くも国王を長官と見比べてしまっていた。

「茶道具と湯沸しを次官殿に」

国王に命ぜられて、女官たちがリアンの前に道具類を並べ始める。

フローネだけは王妃の傍らを動かさず、立ち尽くしていた。

相変わらず薄紫の瞳からは憎悪が溢れている。

自治省長官は部下の邪魔にならぬよう、席を立つや、やや斜め

後方に下がった。

彼の動きで、またも高貴な香がくゆったが、リアンは気づかない。

(この展開は予想していなかった…茶を喫す作法はともかく、点てる

作法は、随分さぼっていたからな…あんまり自信ない)

母上様ごめんなさい、口の中で謝りながら、リアンは茶壺の蓋に手をかけた。

国王と王妃、元王子の公爵に母が王女という伯爵夫人。

これほど身分の高い方々に囲まれて、一挙一動を見つめられて、

茶を入れなければならぬというのは、ひどく緊張することだ。

湯の量、適温、茶葉の量、蒸らし時間。

最高のものを点てるためには、少しのミスも許されないもつとも、リアンにとって有利な条件は、持参した茶があまり国内で出回っていないものだという点だ。

しかし、だからこそ最高の状態でお出したい、とも思う。

最初の碗に茶が注がれる。天上人に供する場合の作法。

まずは入れた本人が静かに飲み干す…害意のないことを示すために。

「では次の碗は私が」

2碗目をミルケーネ公爵がゆつくりと何口かにわけて飲み干す。

この場では彼がリアンの後見役だ。

次官が粗相をした場合、咎は上司である長官にもかかることになる。

「こちらからは私が検あらためましょう」

フツサル伯爵夫人フローネが動こうとしなかったため、

別の女官が3碗目を取った。

初老の婦人で、恐らく王妃付きの女官長であろう。

こうして3名が飲み終わったところで、茶葉と湯を新たにし、いよいよ

国王と王妃のための茶が点てられる。二人は同時に茶碗に口をつけた。

「これは…？一口目は苦く感じられるが、後味が甘い」

「異国のお茶でしょうか？初めて味わいました」

国王に次いで、王妃が感想を述べた。二人とも美味しい、とは言わない。

「西域リウムに産する苦茶にがというものです。毎日飲むのであれば緑茶茶やが相応しいですが、たまに飲むのであればこのようなものもよろしいかと。」

独特の苦みと甘みが面白く、しかも、健康に良いと言われている。

胃の腑が弱っている時や、御酒を召され過ぎた時などは特に……」
陛下の御代が長く平安に続きますように、とリアンは締めくくった。背後からはキリルが彼女を暖かく見守っている。

リアンは気づかないが国王はミルケーネ公爵の気持を察していた。

「珍しい西方のお茶をありがとう」

王妃がお礼を述べ、リアンは受け礼をして、青磁の壺を初老の女官に手渡した。

これにて無事茶会終了という、まさにその時……思いがけぬ国王の言葉が

新人次官の心を切り裂いた。

「父上と母上はお気の毒なことであった」

何を……

この御方は。この時機タイミングで何を仰せになるのか。
リアンはまだ片づけられていなかった急須を国王に向けて投げつけてやりたくなった。

王は、知っていたのだ。当然か。地方都市にも王の耳や目がある。
“世紀のロマンス”と持て囃された超有名・駆け落ちカップルが急死すれば、彼の元にも時をおかず知らせが届けられるであろう。

「2年前になるか……ご両親はルーマ市を襲った集中豪雨で亡くなっ

たと

聞いている」

「…お気遣い痛みいります。

亡くなる時も二人、手を携えて共に逝ったので、不幸ではなかったと思います」

イサに留学中のリアンに突然舞い込んだ訃報。

急きよ帰国して両親の遺体を探しまわり、土石流の中に二人を見つけた時、

リアンの人生は大きく変わってしまった。

嵐の中で相当揉まれたであろうに、二人の手は死しても固く握られていた。

父クロスの懐中からはボロボロになった時計が出てきた。

時計の内蓋には「ごめん、リアン。愛する」と小さく刻まれていた。

その後の数か月をルーマでどう過ごしたのかリアンはよく覚えていない。

救援部隊の中で働いていたはずだが、正直自分が役に立っていたのか分からない。

「では、私たちはこれにて」

リアンの心が現在と2年前を彷徨いはじめたのを傍らで察して、キリルは急いで辞去の礼をした。

ぼんやりしたリアンの手を引き、部屋を出る。

フロアーネが追ってきた。

しかし、薄紫の瞳に浮かぶのは憎しみではなく戸惑い。

「二人とも…亡くなっていたの？」

キリルが代わりに頷いた。

王と王妃、公爵は知っていたことだが、伯爵夫人は知らなかった。

フロローネはそれ以上何も言えず二人を見送った。

*** **

気がつけば、リアンは自治省政務次官執務室に戻っていた。何だか身体が暖かくて、心地よい。王妃様に花茶をいただいたせいかな。

「大丈夫か、リアン？」

え、と顔を上げれば目の前に藍色の瞳。

神代の衣装を纏った御方の両腕が背中に回されている。暖かいのは体温が伝わるから…そこまで思い至ってギョツする。

(これって、長官に、だ、だ、抱きしめられているの、私??)

どうやら帰りも地下通路を使い、キリルに手を引かれて戻ってきたらしい。

そして、何がどうなって、この状況…リアンの心臓は早鐘を打った。

「長官、申し訳ありません、私、あのその、少し呆けてしまいました。」

慌てて身を離し、数歩後ずさる。

キリルは一瞬不満そうな顔をしたが、リアンを引き留めはしなかった。

「なんだか、茶会で思ったよりも緊張したみたいで…思いがけず国王陛下もお出ましになりましたし。本当にご迷惑をおかけしました」

「もう大丈夫…？」

「大丈夫です。いつも通り元気です…どうぞ公爵邸にお戻りを。貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございました」

長官と二人きりというのは何故か心臓に悪い。
グウタラ上司で構わないから早く、屋敷に帰って欲しい、
リアンは切に切にそう願った。

しかし、キリルは自分のペースを崩さない。

「フローネに目をつけられたようだね」

「…あの方が、私を毛嫌いするのは分かります」

リアンは一つ気になっていたことを長官に尋ねてみた。

「あの、長官。フローネ様はご家族の方とは…うまくいってないのですか？」

白絹の両手が伸びてきて、リアンの頬を包む。

答える代わりに触れさせる…というわけではないだろうが、

吐息が感じられる近さに、本当に本当にリアンは困ってしまう。

先ほどはするりと抜け出せたのに、今はなぜか動けない。

「フローネの母リウカが早くに亡くなったことは聞き及んでいるだろう。」

父君にあたるアジヤ侯爵は…悪い方ではないよ。

フローネのことを気にかけている。

ただし、フローネにとって母親違いで同い年の弟がいるというのは許せないことなのだろうね。

夫君のフツサル伯は、ちょっと歳が離れているけれど、温厚な人物だ。

王都ではなく、ご領地で過ごされることが多いが」

つまりは王都で暮らす夫人とは別居中。

（「私たちは」仲良し家族なので）（「貴女たち」の家族と違って…）

リアンが意図せず口にした言葉は、

フロローネにとって猛毒となってしまうたようだ。

彼女の蒼白の顔が思い出される。

「彼女が気になる？」

「仕掛けてきたのはあちらですが、私も酷いことを言ってしまうました」

「私のことは気にならない？」

「はあ……？」

キリルの顔が更に迫ってきた。

（近い、近い、近い……： 他にもセクハラですか、パワハラですか）

「今度、釣り書き持ってくるからしっかりと目を通すように」

「釣り書き？」

「間違った。個人調書。自分の上司のことくらいしっかり把握しておきなさい」

額に微かに触れる唇。固まるリアン。

よろしくね、と綺麗に微笑んで、自治省長官はリアンの部屋を出て行った。

第二章 自治省の美貌小姑 その2（後書き）

”世紀のカップル”実は…の展開で申し訳ない。
しかし二人は幸せでしたよ、間違いなく。

次章、リアンの叔父クロン認定・要注意人物その2が登場します。
キリルとその人物の間で大舌戦が繰り広げられる…予定。

第三章 自治省の爆弾親王 その1（前書き）

自治省の新人政務次官として頑張るリアン。

その仕事模様を少しばかり皆さまにご紹介いたします。

長官の意外な？面も次々登場。

第三章 自治省の爆弾親王 その1

官庁仕事始から半月をリアンは怒涛のように過ごした。

まず手がけたのは、少しばかりの省内人事異動。

伯爵令嬢だろうが“世紀のロマンス”の娘だろうが、田舎者の新人。いきなり自治省のナンバー2にそんな奴がきて、ぎゃあぎゃあ騒げば反発必至。

…さりとて波風立てず「お飾り」をやっているのは性に合わない。鬼女と言われようが魔女と言われようが、構うものか。

誰の、何の、思惑で自治省政務次官なんて高官職に就くことになったのか

分からないが…せいぜい利用させてもらおう。

私はここでやりたいことがあるのだから。

*** **

自治省政務次官室はここ半月の内に随分と手狭になった。

最上階にある長官室ほどではないものの、3階にある次官室にはかなりの

スペース空間が確保されていたのだが。

今はリアン自身と補佐官であるヴァンサランが使うもののほかに、8人分の長机が運びこまれている。

リアンの席に一番近いところにヴァンサラン用の机が置かれ、あとの8人分は省内の各部署から抜擢した役人たちのものだ。

ファネ16州を一人当たり正で2州、副で2州ずつ担当してメインもらい、政務次官に上がってくる決裁書類を精査させる。

普通ならば、長官や次官に上がってくる決裁書類の類はほとんど右から左に署名・押印して流してゆくようなものだが、リアンは自分の分からないことに形ばかりの承認を与えるのが嫌だった。

一通り目を通して、「何かオカシイ」と経験と本能が告げる所を各担当官に再度秘密裏に調査してもらおうことにする。そうしてみると。

幾ら比較的潤沢な予算が配されているといっても、使い方間違っていますか？という新人次官でも分かる陥穽がざっくざっく見つかった。

「：サラン、この前のソイ州の官舎建設の件、却下」

「現地を仕切っているカリム大臣に睨まれるぞ」

「だっておかしいでしょう。何で中央から派遣される役人のためだけに

豪華官舎を造営しなきゃいけないの」

中央から地方に派遣される役人はかなりの高給取りなのだから自分で家を借りるなり買うなりできるはずだ。

お偉い大臣が怖くてこの仕事できるか、とリアンは補佐官の警告を一蹴する。

ヴァンサランは、「だ、そうだ」と言って、

それ以上は上司と争わず、ソイ州担当官サナンに向けて不可となった書類を紙飛行機にして飛ばした。

「次官殿：国民リゾート村の件は…？」

トマス州担当官のアイルと副官のフェイがおずおずとお伺いを立てる。

二人ともやや太めの、いい歳をした中年おやじなのだが、

リアンを見る目は子犬が子羊のようだ。
もとより次官付の上級官吏でそれなりに経験を積んでいるのだが
年の暮れにリアンに鬼のように叱り飛ばされて以来、本気で彼女を
怖がっている。

ちなみにこの二人以外の次官付は全員交代となった。

理由は簡単。ファネ国16州が書けなかった連中だ。

もちろん頭は空っぽでも、権力者や有力商人の縁故であつたりして、
それなりに省内に留めておく価値のある者もいるにはいたが。

自分の頭脳^{ブレイン}としては不要と、リアンは“丁重に”配置換えを乞うた。

(なんで南海岸ヴァカンス村作るのに自治省が金を出すんだ…!)
トマス州から寄せられた企画書と嘆願書を見せられた時、

新人政務次官は頭に血が上るのを感じたが、一応二人の話聞いた。

結果、

「その件、来月まで保留。2週間以内にもう一回企画書を提出させ
て」
となる。

聞けば昨年発生したハリケーンの影響で南部4州の内、トマス州と
エンジェル州に深刻な被害が出たそうだ。

現地の新たな雇用創出と観光産業復興という目的を考えれば、
国民リゾート村の発想自体は悪くない…が何か胡散臭くもある。

「アイル、計画実施の場合に関わってきそつな建設関係者を洗い
出して。フェイ、昨年のハリケーン被害報告書を持ってきて」
わたわたとトマス州担当官と担当副官は執務室を出ていった。

少し太めの二人だが、数か月後は見違えるほど精悍になるだろう。ヴァンサランは近未来を正確に予測した。

*** **

お昼を回ったところで、政務次官室にはしばしの間
リアンだけが残された。

ヴァンサランを含めた9名には食堂で昼食を取らせ、
1時間ばかり休憩させる。

リアンだけはアギール家から届けられた弁当をその場でつつく。
そうしながら、

読み終わらない企画書やら要望書やら嘆願書に目を通していく。

ふと傍らを見やれば、書類の山の一番上に見慣れない絹張り表紙。
いつの間に置かれたものだろうか。

リアンは読みかけの企画書から目を離し、その綴りを手にとった。

藍色の絹地に銀糸で刺繍されているのは、<自治省政務長官個人調書
>。

何か読みたくない」とヤサグレつつ、少しばかりの好奇心に負けて
絹張りの表紙をめくる。

「キリル・ヒヨウセツ・ミルケーネ

ファネ暦×××年11の月3の日生まれ。

ファネ国第10代国王イランサと王妃イルーネを両親とする。

第11代国王キランサの異母弟。

第12代国王（現国王）ソランサの叔父。

成人後、ミルケーネ公爵を襲名すうことにより臣籍に下る。

現・自治省長官」

…ここまではどうということのない履歴書だ。プロフィール問題はそこから先。

「ファネ国第10代国王イランサは生涯において4度婚姻。

最初の王妃ソラリヤは一子（第11代国王キランサ）の生誕と同時に逝去。

二番目の王妃リリスは暗殺により、三番目の王妃カーラは事故により逝去。

四番目の王妃イルーネは、太王太后として御存命、現王室では最長老。」

…王様四十代なのに、叔父のキリルがずっと若くて三十前というのはこういうことか。

二代前、第10代国王の御世、ファネ国政情は荒れていて周辺との国境紛争も

深刻であったと聞く。

王妃さまがお産で亡くなったり、暗殺されたり、事故死したり、これだけ不幸が続くと何かあったのかと勘繰りたくなる。

しかし、長官、私にこれを読まず意図はなんだ…？

個人調書にはまだ続きがあった。

「趣味 旅行（温泉、地酒、郷土料理、祭り…）

読書（歴史、数学、天文学…）

特技 8カ国語 剣術 棒術 乗馬 星占術 …」

だめだ、長官、アギール公爵、アンタの常識は訳ワカラナイ。

最初の1枚目はともかく、2枚目以降はどう考えても人事で管理している

調書ではない。

はつきり言って、長官の趣味も特技もリアンにはどうでもよい。

しかも、その後、なぜか「これから行ってみたい場所」とか「やってみたい事」とかが、それはもう長々と書きつらねてある。

(一体、何の嫌がらせだ、長官…っ)

思わず拳を握りしめたら、変な風にスプーンが曲がってしまった。おじいちゃんごめんなさい、家紋入りの銀匙を一つダメにしてみました。

リアンは心の中でアギール伯ハリドに詫びた。

「長官から、今日は一回も次官に会っていないねー、と言われたよ」とにかく、極力、全力でキリルには会わないようにしよう。そう決意を新たにしたらリアンに、お昼から戻ってきたヴァンサランが無情にも告げた。

彼に押し付けようとしていた長官決裁の書類が宙に浮く。

「それ、自分で持って行ったほうがいいと思うぜ」
補佐官が顎をしゃくって、リアンを促す。

全く、上官に対する態度となっていないが、ヴァンサランは誰に対してもぞんざいな口を聞く。

たぶん…彼が主と認める男以外には。

うつつ、小さく呻いて政務次官は立ちあがる。

決裁書類を挟みこんだファイルを小脇に抱え、それから縦長の紙袋を一つ

反対の手に持つ。

紙袋の中身はずっと渡そうとしていて、そのままにしていたものだ。

「やあ、リアン。待っていたよ」
自治省長官はやたらに分厚い革張りの書物から顔を上げて次官を迎えた。

どうみても省内書類ではない…何かの歴史物？

リアンの頭に（趣味、読書、歴史ほか）という調書の中身がちらりと点滅した。相変わらず仕事する気のないグウタラ長官だ。

「こちらの書類に署名と印をいただけませんか」
卓の上に、要領よく持参した紙束を並べてゆく。

「私の個人調書には目を通してもらえたかな」

キリルはペンを取って、さらさらと署名しながら（いつものことだが中身を

どの程度見ているのか、かなり怪しい）、尋ねてきた。

「それなんです、部下の私が見てよい内容だったのかどうか。

かなり長官の個人情報の特記されているようなのですが」

何のつもりよアレは、と怒鳴りたいのをこらえ、しごく真面目な顔を作る。

思い出すつもりはないのに、記述内容が頭の中に甦ってくる。

その冒頭は。

“キリル・ヒョウセツ・ミルケーネ

ファネ暦×××年11の月3の日生まれ”

「あれ…？」

「…ん？」

頭の中に浮かんだ数字が意外な現実を突きつける。

リアンが上げた声にキリルもペンを止めて彼女を見た。

「長官つて、まだ25歳だったんですか…年下？」
いくら王族出身でも中央官庁の長官という重職であれば30歳近くには
なっていると勝手に考えていたのだが。

「…年下は嫌い？」
キリルの手がすつと伸びてきたが、“想定内”とリアンは上手く避けた。

長官の“傾向と対策”を日々学習する次官である。

書類と一緒に持参した紙袋からガサコソ何やら出して卓の上にでんと載せる。

「長官に貢物です」

「貢物？」

「遅ればせながら、就任のご挨拶と新任のご挨拶その他諸々（もろもろ）を合わせ

まして…全国地酒収集もご趣味だと伺っているので
何せ自治省アンケート98%の回答結果だ。

「それはまあ…ご丁寧に」

自治省長官は瓶のラベルを確かめながら、皮肉げに言った。
どうやらお酒の贈り物はあまり喜ばれなかったらしい。

「でもシヨウコ酒のストックならもうあるよ」

「ええ？フアナ国ではまだ珍しいものと思いましたが」

「私の収集物を甘くみないでほしいな、次官。
コレクシヨン

趣味は旅行と書いてあっただろう。

隣国イサには私も足を運んだことがある」

「公爵さまが隣国までですか？それは初耳です」

そう言うとキリルの機嫌はなぜか一段と悪くなった。
このままだと長官決裁書類にハンコを押してもらえない。
あの高価そうな翡翠の角印はどこだ。

リアンは目を泳がせつつ、紙袋から奥の手を出した。

「ではこちらを差し上げます。」

絶対、長官のコレクションにはないものです」

シヨウコ酒の横に並べたのはラベルのない陶器の壺。

「これは…？」

「ワタクシが造りました自家製ウメエ酒3年物です」

「ウメエ酒？」

「極東の帝国の更に東に小さい島国があるとか。」

そこで採れる果実を蒸留酒に漬け込んで造ったものです」

「その果実というのは何処で？」

「イサ留学中に王立植物園で臨時雇い（バイト）したことがあって、
そこで

試験的に栽培しているものを少々分けてもらったんです」

ちなみにお酒には白砂糖ではなく黒砂糖を使っている

我ながら惚れ惚れする出来具合の…と本来の目的を忘れて滔々と説明
していると、長官はいつの間にもやら固まっていた。

「…長官？」

まずい、また失敗か。

高貴な御方は庶民の造った果実酒など召されないか。

「へえ、君は、留学中にそんなものを造っていたのか」

気づけば、怒り半分、呆れ半分の藍色の双眸を向けられていた。

「…州費留学生で、臨時雇い（バイト）？自家製果実酒造り？」

そんな理由で私の誘いを断っていたのか」

後半は意味不明だが、リアンは自分が失言したのに気づく。しまった、州から研究課題として与えられていた「外交」と「地方行政」の勉強を疎かにしたことはなかったが、留学中イロイロ楽しんでいたのでバレってしまったか。

「え〜と長官、ウメエ酒は冬場だとお湯に割って飲むと美味しいですよ。」

健康にも良いですし」

「君の健康志向はどうでもいいよっ！」

ああ綺麗な手で卓を叩いたよ、このヒト。なんかもう面倒くさい。

「…お気に召さないようですので、この2本は持って帰ります。」

今度、自宅で叔父と酒盛りでもします」

書類はあとでヴァンサランを寄越すんで、と付け足して次官は逃げることに決めた。98%の回答率もアテにならない。

「さて、2本とも置いていけ。それか押印するまで待ってる」

キリルの口調が乱暴になっている。

大貴族さまの余裕もどこへやら、苛立ちが表情に出てしまっています。

「…ご迷惑では？」

「シャイン子爵と酒盛りする位なら、私と飲もう」

「長官、省内で飲酒はダメだと思います」

「…長官である私が許可する」

どこの暴君ですか貴方は、と抗議しかけて、突然降って湧いた爆笑に遮られる。

振り向けば無精髭をはやした軍人が一人立っていた。

短く切りそろえた黒髪は櫛を入れるのは忘れたようにボサボサ。

上着の前ボタンを開けていて、中から見えるシャツには皺が寄っている。

その人はお腹を抱え、目に涙を浮かべたて笑い転げていた。

誰だ、この不良オヤジは。

リアンは取りあえず相手が回復するのを辛抱強くまつた。

けれど、求めていた答えは背後の長官からなされた。

「また突然のご訪問ですね…ワグナ殿下」

ああ、今日は厄日だと、自治省政務次官はこっそり嘆息する。

現国王の弟王子ベリル。通称ワグナ殿下。ファネ王国軍総大将。

そして、母ミアンを追いかけて回した迷惑王子。

(…ついに立たな、要注意人物その2)

第三章 自治省の爆弾親王 その1（後書き）

リアンの自家製ウエメ酒。きっと美味しいですよ。

私も自家製梅酒で温まってからひと眠りすることにします。

ついに正式登場ワグナ殿下。

キリルにとっては現国王同様、甥にあたる人物です。

二人の舌戦、次回になってしまいました、お許しを。

第三章 自治省の爆弾親王 その2 (前書き)

リアン。

君はもう少し伯爵令嬢としての慎みを身につけてくれ。地方役人として培った処世術を中央でも生かしてくれ。売られたケンカを買ってばかりいたら、死なないまでもこれからの人生どんどん厳しくなってしまうよ！

第三章 自治省の爆弾親王 その2

リアンの叔父、シャイン子爵クロンは王弟をこう評した。

（端的に述べると、腹黒い、嫌味、陰険、狡猾、という感じかな）
そして要注意人物その1指定のフツサール伯爵夫人フロローネにしたような甘い弁護フォローは一切しなかった。

クロンの全身からアギル殿下に対する嫌悪がダダ漏れする。

（とにかく、かなり壊れている奴でいろいろ危ないオツサンだ。

性質たちの悪い変態おやじだ。遭遇しそうになったら全力で逃げる）
最後に、王族なんてロクな奴いねえ、とボソボソを悪態ついていた。
アギール伯爵次男であり、シャイン子爵を襲名しながらも
その王室に対する不敬罪とも取れる言動には理由がある。

なにせ“世紀のロマンス”カップルの駆け落ち婚を幫助して以来、
アギール家一門は王族から苛められ続けてきたのだ。

さすがに、纏まりかけていた伯爵令息と子爵令嬢の成婚に
横槍を入れたのは王家側だったので、表立っての
公職追放や爵位剥奪は行われなかった。

しかし、王家からの冷遇と王家おもねに阿る貴族からの嘲笑イビリは
長く続いた。

権謀術数に長けた老獪なアギール伯爵はともかく、
まだ若かったシャイン子爵への風当たりは相当に厳しいものとなっ
た。

叔父の性格が…少しばかりヤサグレしてしまったのも致し方ないこと
なのかもしれない。両親のせいで、と申し訳なくも思う。

王族なんてヤダヤダと呟くクロンに、リアンは同情を禁じえなかつ

た。

「お前がクロスの娘か。いきなり自治省政務次官とはご大層なことだな」

笑うのを…いや、嗤うのをやめた男はリアンに近付くと、馬鹿にするような調子で口火を切った。

藍色の瞳がリアンを見下す。

長官と同じ色の瞳。

けれどもずつと鋭くて、威圧的な、

恐らくは人の命…それも多くの…を奪ったことのある者の瞳。

キリルの瞳には謎があるが、それでも優しさがあった。

国王の瞳には為政者に相応しい理知的な明るさがあった。

でも同じ藍でもこの人は…“囚われてしまっている”

…でも今更、何に？お父様もお母様ももういないのに。

「ワグナ殿下でいらっしやいますね。お初にお目にかかります。

クロスとミアンの娘でリアンと申します」

(全力で逃げる…)

叔父の忠告と自分の本能はそう叫んでいた。

でも、この男から逃げてはダメだ、後ろを見せてはダメだ、弱みを見せてはダメだ…正面から対峙しなくては。

新人の政務次官として丁寧に挨拶し、深く頭を下げる。

しかし次の瞬間顔を上げるや、リアンはファネ国軍総大将を

正面から睨みつけた。

心穏やかな時、黄緑の瞳は春の若草のよう。
見る者の心を暖かくする。

しかし今は、春の嵐を巻き起こして。
見る者の心をざわめかせ、翻弄する。

キリルはその瞳に息をのむ。いつかも見たその真剣な眼差し。
彼はベリルを制止しなければと思いつつ、
もうしばらくリアンを見つめていたいと欲を出す。

ベリルは同じ瞳を持つ、「あの人」を思い出した。

「あの人」は優しいそよ風のように。初夏の清水のように。

けれども。

これほど生命が^{ほこほこ}進むような強い瞳を自分に向けたことはない。

「…小生意気な娘だ」

「中央官庁には新人や若者イジメが趣味のジジイやオヤジ連中が
跋扈^{はつこ} していると聞き及んでいます。」

「図太くないと生き残り（サバイバル）できませんからね」
わっはっはと、できるだけ豪快に笑ってやった。

長官^{チーフ}ごめんなさい、こんな無礼な部下で、でも就任一カ月で免職^{クビ}は
勘弁してください。内心で上司に手を合わせる。

「口の減らない奴だ。育ちが悪いせいか」

王弟は乱暴にリアンの纏め髪を掴み上げると、乱暴に引つ張った。
金茶の髪がばらばらに解け、背中に広がる。

「私の部下に手荒な真似はやめてください」
慌ててキリルが机から飛び出すと、ベリルの腕を払った。

「汚らしい髪の色だ。冬の氷水で色を落としてしまえ」

「氷水で濯いでも、白銀にはなりませんよ。申し訳ありませんが」
「切れ、染める、髪にしるっ！」

激昂しているのは、王子の方で。リアンの声は冷静だった。

「両親譲りの外見を偽るつもりはありません。

私が“あのアギール家”の者であることは入省初日にして
知れ渡っておりますし」

「随分反抗的な態度だな。国軍総大将の不興を買って、
自治省政務次官が長く勤まると思うなよ」

…ベリルの言葉はただの脅しではない。
リアンはそれを正しく理解していた。

他省も似たり寄ったりだが、自治省は立場上、王国軍に強い態度に
出られない。

国境紛争、破壊活動、自然災害などが16州で生じた時、
もちろん州府の役人や州警察、州軍がいち早く動くわけではあるが、
それだけで事態が収束しない場合は王国軍の出動となる。

州府からの要請を受け、自治省と王国軍が連携して円滑に
動かないと被害が拡大する…つまりこのような場合、自治省は
国軍に頭を下げる立場になるのだ。

「自治省の小娘が気に食わぬからと、総大将が国軍の仕事に
手を抜くとは思えませんが。」

それとも…貴方は個人的な意趣返しのために、罪もない人を

大勢巻きこんで見殺しにするような方ですか？」

自分はけっして好戦的な人物ではないと思っっているが、
それどころか平凡な生活をこよなく愛する小市民だと思っっているが、
なぜかやっっている事は、王国で一番偉い軍人に：喧嘩売っっている？

もしかして、国軍訊問室に軟禁か、はたまた国軍地下室に監禁か。
おじいちゃん、国軍まで差し入れよろしく。ひもじいのは嫌だ。
リアンは1時間後に待ち受ける自分の運命をぼうやり想像した。

「王族に対しても国軍に対しても不敬を働く女だな。

礼儀を弁えぬ者には躰が必要だ」

しかし、軟禁監禁以前に拳が出る男だったらしい。

ベリルの左腕がリアンの頬を張るために振り上げられた。

その時。

「止めてください」

キリルはリアンを背後から包み込むと、ベリルの左手を振り払って
素早く後退した。白絹の手の甲が朱に染まるのをリアンは見た。

「私のリアンに危害を加えることは許しませんよ」

私の部下。私のリアン。

長官、同じ意味で言っっているのですが、

それ、使用法違いますから。

リアンは公爵サマに背後から抱きすくめられたまま動けなかった。

この人は上司だから、年下だから、どうか変に緊張しませんように、
顔が紅くなりませんように、と心の中で呪文を唱え続ける。

何でだか、リアンにとって、王弟殿下とのガチンコ対決より、

公爵閣下に優しく扱めとられることの方が心臓に悪い。

リアンの頭ごしでミルケーネ公爵は眉をひそめた。

相手が、政務次官に対して、それでも手加減しているのは分かっていて。利き腕を使わず、しかも平手だ。

彼が本気を出せば拳一つで相手を死に追いやれることを知っている。キリルは、実際に自分の甥がそうして敵を地獄送りにする様を何度も目にしてきた。ベリルは嬉々として殺る時は殺る。

「ワグナ殿下、私の執務室に勝手に入ってきたのは貴方の方ですよ」

「…最初に無礼を働いたのは私だと仰りたいわけですか」

ベリルは敬語を用いた。しかし微塵も敬意が籠められていない。

彼が自分よりずっと年下の叔父をどう見ているか、これで明らかだ。

「貴女も悪いのですよ、リアン。王弟殿下に対して何という態度です。」

謝罪なさい」

そう耳元で囁くように叱ってくる。

リアンにはまだワグナ殿下に対する反抗心がたつぷり残っていたが、長官の諫めには逆らう気持ちが起こらなかった。

リアンとベリルの争いを何とか収めようとするキリルの心遣いが伝わってきたから。

「…申し訳ございません、ワグナ殿下」

よくできましたと、

優しい手がリアンの乱れた髪を何度も撫でて整えてくれた。

ベリルはリアンの瞳を睨みつけたまま口を引き結んだ。

それで私はこの後どうすれば…？

全力で逃げるといふ選択肢を再考しつつ、次官は時機タイミングを伺った。

「少しお待ちなさい」

離れる時に一瞬だけ。

何か柔らかくて暖かいものが頭に押し付けられた気がしたが…
よく分からない内に、見れば長官は自分で卓まで戻っていた。

リアンが持ってきた書類をざっざっと卓の端から端までに並べると、
ぺんんと連続技で印を押してゆく。あっという間の早業だ。
もちろん中身を確認している様子はない。

「これを下の連中に持っていきなさい」

「畏まりました、長官」

「私は、しばらくワグナ殿下と会談しますからここには誰も近付け
させないように…分かりましたね？」

「仰せの通りに」

リアンはキリルに頭を下げると決裁書類を受け取って部屋を出た。
途中、ベリルの前を通り過ぎる時、無視してやるうかと思っただが、
上司を立てて敬礼することにした。
大人の対応というヤツだ。

階下に向かう踊り場のところで、一度だけリアンは振り返った。

扉の向こう。突然現れて爆弾を投下した軍人の姿はもう見えない。

（あれがワグナ殿下）

途端に心の中でいろいろな感情が渦巻いて、無意識に胸を押さえる。

叔父の忠告がある。

けれどもそれよりずっと前に…母ミアンが生前に告げた言葉が甦る。

「ベリル王子。この名を覚えておきなさい。

ワグナ殿下とも呼ばれる方です」

「王弟殿下でしょうか？…名前くらいは知ってるよ」

リアンが隣国イサに留学する少し前のことであったか。

父クロンは出張で家を空けていた。

結婚して20年以上経っても熱愛夫婦で、父は母の傍らを

離れることを嫌がったが、ごくまれに止むを得ず一日二日ばかり

留守にすることがあった。そんなある時。

母は鏡台の前でリアンの髪を梳いてやりながら、

ある貴人の名前を告げた。

「クロスとミアンの娘である貴女を…あの方は憎むかもしれない。

あなたの幸せや自由を壊そうとするかもしれない」

その時まだリアンは地方都市暮らしで、自分を庶民と信じていて、自分の親が“世紀のロマンス”カップルであることを知らなかった。当然ミアンとベリルの拗れた関係についても思い至らない。

「母さん？何だか王子って怖そうな人に聞こえるけど？」

どのみち王族に会うなんてことなんて早々ないし、とリアンは鏡の中の母親に笑ってみせた。

「そうね、お目にかかる機会なんて、滅多にないものね。

でも…もし、もしもよ、クロスも私もいなくて、貴女が一人で

王都に行かなければならないことになったら覚えておきなさい」

「母さん？」

「覚えておきなさい。ベリルは貴女の心は守ってくれない。
でも、貴女の命はきつと守ってくれるでしょう」

お母様：私はここまで辿り着きました。

寂しい眼をした不良中年にお会いしましたよ。

リアンは3秒だけ亡き人に黙とうを捧げ、

それから頭を振って自治省次官としての自分に戻った。

第三章 自治省の爆弾親王 その2 (後書き)

この章はもう一話続きます。

リアンの母ミアマンとベルル王子が拘れる前の関係はどつだったのか、
など

ちあひさちあひさと申します。

第三章 自治省の爆弾親王 その3 (前書き)

ベリル&キリルの舌戦…口だけで終わりませんでした。

昔は純情一途な王子さまも“生涯にただ一度の恋”に敗れて
中年になると……王弟殿下みたいになってしまいました。

第三章 自治省の爆弾親王 その3

リアンの気配が自治省最上階から消えるのを確認して、キリルは翳のある笑みを年上の甥に向けた

「それではお互いに言いたいことを言い合つとしますか。

…私の“可愛い人”に何してくれるのですかね、この不良オヤジは」

「…お前、あの小娘の前だとトコトン馬鹿な男に成り下がるな。

脳みそ溶けたか、腐ったか。

あの眼差し、微笑み、抱擁…砂を吐きたくなつたぞ！」

消毒だとばかり、ベリルは卓に置いてあつた酒瓶に手を伸ばした。

公爵閣下は王弟殿下の手の甲を容赦なく打ちすえた。

「リアンからの大事な贈り物です。触らないでください」

「ケチくさいことをいうな。自家製果実酒とやらをひと舐めさせる」

「嫌です、一滴だってあげません。」

私が毎日少しずつ少しずつ大事に大事に飲むんです」

「その粘着体質なんとかし…じゃあ、こつちをもらつぜ」

自治省長官が陶器の壺を死守する間に、ベリルはシヨウコ酒の瓶を奪つた。

「あ、返しなさい！それは私がリアンと酒盛りする用のものです！」

「シヨウコ酒など、お前の隠し貯蔵庫に幾らでもあるだろっ！」

「ふざけるな、酒が飲みたきゃ国軍の地下に腐るほどあるだろっが！」

酒瓶を奪取しようと、キリルは実力行使に出た。

相手が王弟だとか、国軍大将だとか、甥だとかいう遠慮は一切ない。

滑るような動きで近づくや、ベリルの手首を掴み、
間髪をいれず捻りあげた。

キリルのゆったりとした長袖がめくれ上がり、
白絹の手からは想像できないほど引きしまった筋肉が露わになる。

彼が個人調書に自ら記した「特技：剣術 棒術」というのは偽りで
はない。

若干補足するなら、剣や棒といった武器がなくても十分通用する
戦闘能力を持っていた。

「誰に喧嘩売ってるつもりだ？この色ボケしたクソ餓鬼が」
対するベリルも、しかし、負けてはいない。
相手の脛を蹴り、軽く脇腹に肘鉄を喰らわせる。

ベリルの外見や言葉づかいはおよそ王国軍の総大将らしくない。
日銭を稼ぐゴロツキ傭兵か、下町娼家のチンピラ用心棒か、
そんなところだろう。が、こちらも半端なく強い。
かくて高貴なはずの中年と青年各1名は、政務次官が
持参した酒2本をめぐってとつくみあいの喧嘩になった…

「はっ、さっきは良いトコどりしたつもりか、坊や。

小娘を全力で守ってまゝすみたいな態度とりやがって。俺は悪役
か」

「どこから見ても悪役そのものでしょう？その面は」

「この前、”私たちは敵同士じゃない”とか、ほざいてなかったか？

二枚舌、いや、百枚舌の腹黒め。俺にはあの小娘を苛める権利が
ある！」

「胸張って言う事ですかソレ…もちろんダメとは言いませんよ？

その度に私がそれはもう優しくリアンを慰めてやることにします
から」

「国軍総大将をてめえの私欲のための利用するつもりか？」

「大人しく利用されてください。」

私の恋路を邪魔したら、この世界から本気で強制退場させますよ？」

ある意味…二人は互いの戦闘能力を正しく認識していた。

そしてどちらも王家の血を受け、かたや国軍大将、かたや自治省長官と

国家の要職に身をおいていることも忘れていない。

「殺し合い」と「喧嘩」の違いを弁えて、手や足を出しながらも眼に見えるところに派手な傷や痣を作らない。

「11歳の時に初めて会ってから気になっていて心惹かれて、

17歳で彼女への恋を自覚して、22歳の時に求婚して断られて。

それを、なんとか四方八方に手を回して、ようやく、

王都に来てもらえたんです。

…それに引き換え、貴方の昔の葛藤なんてどうでもいいですよ！！」

「俺はお前の今の葛藤なんてどうでもいい。」

…頑張っている割に全くの空回りが、いつそ泣けてくるねえ。

11歳の時からとか言っつて、リアンに個体認識されたのは先月のことだろうが」

「それまでは事情があつて正体明かすわけにはいかなかったんです、仕方ないでしょう。」

でも外堀は埋めましたので、あとは本丸をオトスだけです」

「馬鹿め、何も埋まっとらんわ。」

誰がミルケーネ公爵とアギール伯令嬢の中を承認するものか」

「陛下の内諾は得ました」

「あれは内諾とは言わん。お前が煩いから様子見しているだけだ。

リアンの祖父や叔父は全力で反対するだろうよ

…もちろん俺も邪魔してやる」

「そうですか、そんなに私に殺されたいんですか。」

貴方の愛しの御方は彼岸にいらっしやるようですし

…いいでしょう近々お望み通りにしてさしあげましょう」

長官の渾身の一撃が大将の腹に決まるかという瞬間。

ベリルはぎりぎりのところで身体を捻って、攻撃をかわした。

が、完全には防ぎきれず、バランスを崩す。

左手に持っていたシヨウコ酒が卓の角にぶつかって粉々に碎ける。

中からは琥珀色の液体と芳醇な香りが飛び出した。

「何で、ここで貴方と酒盛りしなきゃならないんですかー！」

国軍大将の軍服にも自治省長官の絹服にも等しくシヨウコ酒が注がれ、

途端にキリルが情けない叫び声を上げた。

それが潮時で、二人はこの“拳の語らい”とやらを収めることにした。

*** **

ワグナ殿下は来た時の同じ道、つまり、王族とごく一部の高官のみが知る隠し通路に再び滑り込んだ。

政務次官に“挨拶”し、その上司と“遊ぶ”のに

予想以上の時間が経過していた。

自治省のグウタラ長官をきめこんでいるキリルとは違い、

ベリルは国軍総大将として多忙を極めている。

今も戻ってこないワグナ殿下を心配して（彼を心配してではなく、彼が応対している相手を心配して）部下は青ざめていることである

う。

(しかし、あのキリルが、本気でアギール家の女を…)
世の中、奇縁で充ちているとベリルは思う。

自分たちの代で鬼門となった家の娘をまたも王家の人間が
追いかけることになるとは。

望めばどんな姫でも令嬢でも娶ることができる天上人でありながら、
よりによって、あんな口が悪くて、気ばかり強くて、庶民根性の女
を？

…そんな年下の甥を、可愛いとも可哀そうとも王弟は思う。
そしてまた…憎らしいとも思う。

自分が永久に失ってしまったものを追いかける叔父を。
自分には得られなかったものを、得られるかもしれない青年を。

(とことん邪魔してやる)

例えミルケーネ公爵から返り討ちにあおうとも、大人しくしている
つもりはない。

ベリルの恨みは実はなかなか根の深いものであった。

キリルの父であり、ベリルの祖父にあたるのは第10代国王イラン
サ。

既に故人だが、ベリルがフェヌイ子爵ミアンに求婚した当時は
まだイランサ王の在位中であつた。

ミアン18歳、ベリル14歳の時である。

王立学問所で行われる薬草学の授業で知り合った

4つ年上の淑女^{レディ}をベリルはずっと姉のように慕っていた。

普段は引つ込み思案で恥ずかしがり屋なくせに、大好きな薬草学を学ぶ時だけはハキハキと発言して機敏に動く令嬢ミアン。その後ろを、長い黒髪を一括りにした小柄な少年がくっついて歩いた。

しかし、ミアンが幼馴染のアギール伯爵長子と結婚すると告げた時、ベリルは足元が崩れるのを感じた。

本当の弟であれば、ミアンが知らない男と結婚しても家族でいられる。

けれども、そうでない以上、自分は小さな王子として思い出になり、そしていつしか忘れさられる…そんなことは耐えられなかった。

血を吐くような思いで、ベリルは国王イランサに懇願した。

見栄も矜持も捨てて、王座の前に両膝をついた。

（どうかミアンと結婚させてください。

次の王もまたその次の王も必ず

僕がお守りいたします。

王家の人間として、必ず国を支える人間に成長します

…だから僕にフェヌイ子爵令嬢を与えてください）

世間では、アギール伯爵令息とフェヌイ子爵令嬢の中を王家が権力づくで引き裂こうとしたと言われているが、

これは正確ではない。

祖父イランサは、ベリルが幾度頼んでも、最後まで首を縦に振らなかった。

娘の心はお前にはないと諭され、それでも聞かぬと知るやお前の都合で幸せになるべき者たちを不幸にするなど

雷を落とした。若い王子は衆目の中で国王から叱責された。

また、血の涙を流しながら、ミアンに求愛した。

（必ず貴女を幸せにします。

貴女だけを生涯ただ一人愛します。

必ず貴女を守ります…だから、僕と結婚してください

アギール家に嫁ぐのは、どうかどうか止めてください（

「あの人」の好きな香草ハーブで毎朝花束ブーケを作り、

何度もフェヌイ子爵家へ足を運んだ。

日に日にミアンからは笑顔が失われ、代わりに涙が

浮かびあがるようになった。

そして、終にベリルは会うことすら拒まれるようになった。

祖父が悪いとは言わない。だが、国王の勅命があつたならば。

リアンはクロンと駆け落ちすることもなく、隣国と国境の街を

彷徨いながら貧しい暮らしをすることもなく…

そして田舎で災害に巻き込まれて命を落とすこともなかったはず。

そう思ってしまう自分がある。

愛してくれなくてもいい、微笑ほほえんでくれなくてもいい。

けれども、生きていて欲しかった。同じ世界に在ってほしかった。

例え、憎い男とその男との間にできた子どもと一緒にいたとしても。

祖父は“王”だった。誠の王。

過酷な時代を生き抜き、多くを奪いながら、また多くを生かした男。

しかし、煉獄の中に一生涯身を置くかに思えた、その王は。

4度目の婚姻で幸福を掴んだ。

20歳以上年の離れた巫女に恋をし、

その者を厳俗させ侯爵家の養女とした後に、4番目の正妃に据えた。

二人の間には一子が誕生し、その王子キリルは父王と母王妃の愛情を

一身に浴びて育った。過酷な時代を知らず、慈しまれて成長した。

イランサは王位を長子キランサに譲った後は、妃イルーネと王子キリルを

連れて度々“地方視察”と称した物見遊山に出かけて行った。

イランサ王は73歳で没したが、その最後の10数年は愛する妻と息子に

囲まれて間違いなく幸福に包まれたものだったであろう。

それを思えば

…自分が祖父キランサとその末子キリルを嫌うのも当然ではないか？

第三章 自治省の爆弾親王 その3（後書き）

第三章はこれにて終了。

要注意人物その1と要注意人物その2の苛めはこの後、本格化した
します。

第四章予告。とあるキリルの失言

その1 「リアン、私は君がこれまでに2度結婚に失敗しているこ
とを

知っている」

その2 「貴族の娘はだいたい二十歳位までに嫁ぐ。君は完全な嫁
き遅れだ」

さて、この後、長官と次官の間のバトルやいかに…？

第四章 自治省の防衛部隊 その1 (前書き)

キリル長官のパワハラ・セクハラ発言、大問題です。

第四章は立春祭をめぐって自治省一同がワタワタするお話です。

第四章 自治省の防衛部隊 その1

一の月も終わりに近づいた。

北のカプレス山脈が守りの壁となり、ファネ国王都キサラの積雪はさして多くない。しかし、朝晩の寒さは厳しく氷点下となる。

日が射して暖かくなるはずの昼間も、山脈から吹き下ろす風のため、体感気温では朝晩とそう変わらない。

新年に入って一度だけ降った雪が薄く積もり、

日陰では溶けないまま凍ってしまっている。

油断すると足を滑らせる…王都の人間は慣れたものだが。

王の居城及び中央官庁が集中する王府には最新の工学技術が導入されている。

主要な建物では油圧式暖房装置が中央制御で稼働しており、役所の中はどこもポカポカと快適…とまではゆかないが、外套を羽織らなくても大丈夫な位には室温調整されている。

この辺りはさすが、王府、中央官庁、と田舎育ちのリアンはひそかに感動している。

地方都市ルーマの下級役人用事務室では、ストーブに交代でコークスをくべていた。

燃料運びの当番は楽な仕事ではなかったが、たまにストーブの上で煮込み（シチュー）（肉は市の特売を狙う）を作ったり、黄金芋を焼いたりして皆で少しずつ分けあって食べた。それはそれで楽しい思い出であった。

しかし、王府の先端技術も完璧ではなかったようだ。

一昨日から中央制御装置が故障したとかで、

自治省の置かれる旧カリン宮全体の暖房が一時的に停止した。

ただ今、役人一同、不^{フイシ}満の嵐である。

部屋ごとに小型・中型の石油ストーブを入れて急場を凌いでいるが復旧までにまだ一兩日はかかるらしい。

今のところ体調を崩して欠勤する者はいないが、既に何人かが風邪をひき、省内では鼻を嚙ったり、咳をしたりする音がそこかしこから聞こえている。

…中央官庁としての品位は残念ながらただ今、下降線を辿っている。

自治省次官にとって多少なりとも救いなのは、同じ建物に居る
商務省や工部省の役人との心の交流が増えたことだ。

「いや、今日も部屋の中が寒いですね」

「早く、暖房直つてくれませんか」

「お、その首巻き暖かそうですね」

「これはガンジ州特産の羊毛を使ってましてね、チクチクしないんですよ」

などと和やかな会話が展開してゆく。

共に困難に立ち向かうことで、何となく仲間意識？のようなものが生まれてくる。

しかも、自治省は今回、他の2省に比べて有利な位置にいる。

暖房設備会社を選定した商務省と、先端技術を自慢していた工部省は
少しばかり…自治省に頭があがらない。

もちろんリアンは幾ら執務室が冷え冷えしても、

商務省・工部省に怒鳴りこんだりはしない。

貸しは作っておくものだ。今後のためにも！

「モムル、島嶼4州からの使節は予定通り到着できそう？」

リアンは島嶼4州を担当している役人に声をかける。

次官室付8名の一人だ。

「もともと余裕をもって予定を組んでいたので前夜祭までには何か」

分厚い眼鏡が鼻先まで垂れてくるのを直しつつ、モムルは返答する。まだ、30過ぎの男だが、島嶼4州の一つミマイ州の出身で、寒さが大の苦手だ。

最初見栄を張って薄着を通していたが、くしゃみを7回連発したところ

で
リアン上司に叱り飛ばされ、今は室内で毛糸の帽子と首巻をしている。

「暴風で南洋が荒れてどうなるかと心配したけれど、これで16州とも」

立春祭には間に合いそうね…やれやれだわ」

自治省政務次官は綿入れの上から自分の肩を揉んだ。

綿入れ：次官用の執務服の上から重ね着したものだ。

田舎っばいのは否めないが、来客中ではないので良しとしている。

「リアン、長官がお呼びだ。立春祭の人員配置の件で確認だよ」
ヴァンサランが政務次官室に現れる。

彼に限っては暑さ寒さも無縁のようだ。

赤毛の大男は薄手の長そでシャツ一枚で歩き回っている。

彼がふいとどこかに消えて、そしてまたひよいと現れる時は
ろくなことがない。たいていはお呼び出しが待っている。

「長官、この忙しいのに、また前夜祭の出し物だ、本祭の装飾品だと
言い始めたら、私はキレルわよ」

「まあ、そういうな。長官はあれでお祭り好きだからな。

仕事する気になっているんだから、付き合ってやれよ」

リアンの頭に「趣味：旅行（祭り）」という項目が浮かび上がる。

キリルの個人調書。

何というか、印象が強すぎて、記憶から抹消できない。

「ちょっと行ってくる。サラン、今確認している追加人員配置の部
分、

後から上に持ってきて」

「了解」

リアンは綿入れを脱ぐと、最上階へ向かった。

自治省長官室は予想通り別世界であった。

外は真冬でもここは常春。

旧カリン宮全体を襲った暖房装置故障事件も一切関係なく。

ここだけは、事件後ものの1時間もしない内に、

換気機能付石油暖房機ヒーターが備えつけられた。

なんでも公爵家お抱えの技師が装置と道具一式を持って
馳せ参じたらしい。

しかも、香油を含ませた加湿器まで稼働している。

キリルは贅沢を極めた室の中で、優雅にただずむ…ではなく、
珍しく浮き浮きと動き回っていた。

「リアン、待っていた。立春祭の仕様書には目を通してあるね。
初めてだから大変だと思うけど、昨年の流れと大きな違いは
ないから、サランや8人衆に聞いておけば心配いらないよ」

立春祭。

通常業務に加え、目下どの官公庁をも多忙にしているのは王都を挙げて行われる春呼びの大祭だ。同じような祭りはリアンのいた地方都市ルーマにもあったが規模はずっと小さかった。

リアンは当初、祭事が自治省の職務にさほど影響することはないと甘く見ていたのだが、昨年の報告書を読んで驚いてしまった。何しろ…新年参賀などよりも派手な催し物イベントが盛りだくさんなのだ。

自治省にとって最も重要なのは、

王宮において16州から派遣される使者の接待、及び

王都内における16州による地元アンテナショップ宣伝館の管理を

行うことである。

しかも、立春祭目当てに観光客と商人が急増するため、王都警備のために各省から臨時に人員を出さなければならない。

「…それで前夜祭の行進パレードと本祭の総揃い、

それから後夜祭の舞踏会だけ…」

初めての立春祭準備（しかも長官はアテにならないので、

いきなり陣頭指揮！）に頭が一杯のリアンはここに至るまで、長官の話を

真面目に聞いていなかった。

リアンの中では、長官 表舞台、次官 裏方という役割完全分担の図式が

出来上がっていたので、ミルケーネ公爵のお召しものがどうであるかと、

行進で見物客に配る贈物がなんであるかと、

実はどうでも良かったのだ。

しかしながら…

キリルから渡された色刷りの立春祭<前夜祭・本祭・後夜祭>企画書を

一読して、激しい衝撃を受ける。

(このヒトの常識は私の常識と、違イマス。

誰かこの公爵サマを大型生ゴミ回収日に出しちゃってください)

「何で私が前夜祭で長官と一緒に行進で手を振って、

本祭と一緒に陛下にご挨拶申し上げて、さらにさらに

後夜祭と一緒に花火見ながら踊らなきゃならないんですか…」

しかも、前夜祭・春霞の対の衣装、本祭・白銀の対の衣装(礼装)、後夜祭・星月の対の衣装と、衣装及び装飾品一式の指定まである。

(なぜに、長官と三日間通しの対の衣装しなければならぬんですかー！)

リアンは込み上げる罵声を何とか飲み込み、この一カ月の間に度々体験した長官特有の摩訶不思議な冗談だと思いついた。

「春霞の衣装はリアンにきつと似合うと思うよ。薄紅の羽衣が黄緑の瞳に

映えて…ああ当日は晴れるといいね」

「長官、妄想はそれくらいに」

「今回の衣装については心配はいらないよ。

必要経費で全部落とすから」

「そんな無駄遣いは絶対ダメです」

“必要経費”の出所はどこだ、自治省か、ミルケーネ公爵家か、キリルの個人資産か、いずれにしても後が怖すぎる。

省費の不正支出で摘発されるのも、公爵を誑かしたと醜聞になるのも

まっぴらごめんだ。

「冷静に考えてください。

長官と次官が三日間も一緒に行動してどうするんですか。

どこも滅茶苦茶に忙しいんですよ。次官は裏方に徹します」

「却下。次官披露目も兼ねて、君は三日間私とずっとうと一緒。

これ長官命令」

「アギール家の娘”に珍獣役をやれと」

「ミルケーネ公爵”は毎回、街でも王宮でも見世物役だ」

僅かに籠められた自嘲の念。

キリルの目が笑っているようで笑っていない。

そう、彼は、生誕の時から好むと好まずとに関わらず、

注目される立場に在る。

偉大な王と讃えられる第10代イランサ国王の末の王子として。

大貴族の一位であるミルケーネ公爵として。自治省長官として。

そしてもちろん、若く、美しく、独身の青年として。

束の間、リアンは同情しそうになり…やめた。

それが彼の生きる世界であり、自分とは違う、と。

現在は同じ場所で呼吸しているが、二人の世界は違う。

自治省の中で少しだけ重なる空間があるけれども、ほんの少しだけだ。

彼は中央こくに留まる人間だが、自分はいずれ出ていく。

たぶん、そう遠くない未来に。

「一緒に居てくれ」

リアンの内心を見透かすように、キリルが短く言葉をかける。

その声は真剣で、そしてどこか切なさを秘めているようだった。

胸に小さな痛みが走って、リアンは是はいと否いいえとも答えられない。

代わりに尋ねる。キリルの視線をまっすぐに受け止めて。

「長官、私を自治省に入れてくださったのはどなたですか？」

なぜ…入れてくださったのですか？

なぜ…大した経験のない者を政務次官に就けたのですか？」

リアンは仕事の合間を縫って、何とかこれらの謎を明かそうと孤軍奮闘していた。しかし、手がかりとなる資料も人も出てこない。

自分の目的があるとはいえ、

誰かに…知らぬ間に踊らされているようで落ち着かない。

「…交換条件というわけか？」

常春の豪華サロンに在るといふのに、キリルの纏う雰囲気は大貴族の冷ややかなものへと変わっていく。

「そういうわけでは」

「政務次官は長官が指名し、陛下が任命をする。

君の場合も例外ではない。前次官の急死により、時期的には

異例だが、きちんと正規の手續に則っている」

「質問の答えになっていません」

キリルの機嫌がどんどん外気温に近付いていくのを肌で感じながら、次官の方も意地になった。

次に自治省長官から出た言葉は、

リアンの予想を完全に裏切ったものだった。

「リアン、私は君がこれまでに2度結婚に失敗している

ことを知っている」

「何でそんな話に飛躍するんですか！

人を勝手にバツ2にしないでください。

私はまだ誰とも結婚したことありません！」

「訂正する。2度結婚しようとして、いずれも失敗に終わっている。

一度目は19歳の時。

ルーマ市の役人をしてしている時、3つ年上の先輩と良い仲になるが、そいつが中央政府に抜擢されるや、破局。

二度目は23歳の時。

隣国イサに留学中、母国から短期留学してきた貴族の息子と付き合って求婚されるが、なぜかうまくいかず破局。

貴族の娘はだいたい二十歳位までに嫁ぐ。

現在26歳の君は完全な嫁き遅れだ。

結婚を逃した女性は仕事熱心にならざるをえない」

傷心の過去を暴露され、もの凄く酷い事をズタボロに言われる。

しかし、怒るでもなく、悲しむでもなく、

リアンはただ…あっけにとられた。

長官の思考回路がサツパリわからない。

貴族の娘の嫁ぎ遅れというのは自治省政務次官への抜擢理由になるのだろうか…そんなわけないだろうが。

「訂正します。

長官がお持ちの私の個人調書やらに朱を入れておいてください」
まずは、動揺したら負けだ、と自分に言い聞かせながら。

「2度結婚しようとして、いずれも失敗という部分は事実ですが、
その後がちょっと違います。

一度目はだいたいその通りですが、二度目の貴族の息子云々は完
全な

ガセネタ
虚構です。留学中に特別に親しくした男性はいません」

「ほう…2度目の事実はないと」
キリルの藍色の双眸は今や極寒の吹雪もかくやという状態になった。
過去の乏しい恋愛歴で、なぜここまで上司が不機嫌になるのか、
リアンにはさっぱり見当がつかない。

「二度目の失敗は、別にあります。

“留学から帰ってきて、もしもお互いまだ独身だったら結婚しよう”と

約束した人がルーマに居ましたが……”

「そんな奴がいたのかっ、報告に上がってきてないぞ！」

「大きな声を出さないでください。」

その人も遺体で見つかりましたので……父母が発見された一週間後に……”

町医者をやっていましたので、怪我人の救助に向かって土石流に巻きこまれたそうです、と、リアンは小さく付け足した。

2年前に地方都市ルーマを襲った集中豪雨は、リアンから最愛の家族のみ

ならず、家族になれるかもしれなかった人まで奪っていた。

長官と次官の間には重い沈黙が横たわった。

「立春祭、自治省人員配置の追加書類をお持ちしましたよ」

そこに割って入ったのは、ヴァンサランである。

彼は空気を読まぬふりをしながらも、巧みにリアンを仕事態勢モードに引き戻した。

ヴァンサランから手渡された書類に目を通しながら、

政務次官は幾つか急ぎの案件が階下で自分を待っていることを悟った。

グウタラ長官の訳ワカラナイ戯言に付き合っている暇はないのだ。

リアンの瞳が勝気な光を帯び始める。

「長官、前夜祭と後夜祭は真剣マジに勘弁してください。」

自治省は上2人が不在トッブにしているほど暇じゃありません。

但し、本祭はお供します。一緒に見世物役になりましょう。

衣装の方もお任せしますので、どうぞ不正支出で捕まらない程度に

ご準備願います」

そう啖呵を切って、キリルの返事を待たず長官室を飛び出す。

何だか頭が痛くなってきた。肩も凝って、喉も掠れた感じがする。
巷^{ちまた}はお祭り気分で浮かれているというのに、
リアンは酷い疲労感に襲われながら階段を一段ずつ降りた。

すぐに次官を追おうとしたヴァンサランの足が止まった。
長椅子に崩れるように突っ伏してしまった青年が約1名。
このまま長官室を出るのが躊躇われた。

「公爵、あのさあー」

「何も言ってくれるな、サラン。」

いろいろ失言したのは自覚している。リアンに嫌われた」
リアンに嫌われた、リアンに嫌われた、と鬱陶しくも呟き続ける。

この青年はもちろん、元王子様、今公爵様のキリルである。
放っておくと、シクシク泣く声が聞こえてきそうだ。

「うん、お祭りを一緒に楽しみたかったっていうのは、よく
分かりますよ」

「…しかも、留学中、求婚したのも綺麗さっぱり忘れ去られていた。
いくら正体隠して変装していたからって、酷過ぎる」
今度は酷い酷いと恨み節だ。

もうヤダ、この長官、面倒くさい。ヴァンサランは腕組みをして嘆
息した。

「現実問題、前夜際は無理ですよ。貴方、他にもやる事あるでしょ

う？

あまり“本職”をサボっていると宰相から自治省免職を宣言されますよ」「

「それは困る。これ以上、リアンとの接点がなくなったら耐えられない！」

「ではそこでイジけていないで、“あちらの長官”としてしっかり働いて

きてください。

そうすればちょっとは良いことがあって、後夜祭で一曲くらいは意中の方と踊れるかもしれませんよ？」

ヴァンサランは上手に飴をばらまいた。

かくして、長官は極限の落ち込み状態から脱し、いそいそと動き始めた。

第四章 自治省の防衛部隊 その1 (後書き)

リアンの過去の恋話、また別の所で出てきます。

キリルは「だから私の所にお嫁に来なさい」と言いたかったの
でしょうが

全然ダメダメです。出自の割に口説き方がなっていないのは理由が
あります。

気まづくなつた二人ですが、次回仲直りできるのでしょうか。

「その1」「その2」も登場、アギール家の方々も登場と賑やかに
なります。

第四章 自治省の防衛部隊 その2（前書き）

リアンのお気に入りに入り仮眠場所は意外にも…？

庶民派な彼女はやたらに広い場所もキラキラしい場所も苦手です。

落ち着かなくて。

前回長官と揉めた立春祭イベントですが、さて、彼女はどこまで妥協を…？

第四章 自治省の防衛部隊 その2

ファネ16州。

王都キサラの北辺には山岳地帯を抱えるカプレス州のほかにアギヤ州、ソイ州。

東辺には高原地帯のソニム州と砂漠地帯が半分を占めるシアラ州。西辺には隣国イサと国境を接するルーマ州やカパラ州ほか半島部のトテチ州。

南辺は海洋に面してリゾート地の多いエンジェル州、トマス州、イチヤ州、ソン州。

更に海上には島嶼州としてガンジ州、フス州、ミマイ州、マツカラ州。

第10代国王イランサの治世、ファネ国版図を拡大し周辺諸国を征服して

一大帝国を建設するという機運が高まった。

しかし、国王自身が途中であつさり政策転換する。

武力外交から平和外交に切り替えた…といえは聞こえが良ろしいが、イランサが4番目の正妃イルーネを迎えたことが大きいらしい。

要は20歳以上年の離れた新妻と仲良く(ラブラブ)したい王様が他国に進軍する気をなくした…ことが原因と歴史家たちは分析している。

以来、ファネ国領土は全16州をもって国土としている。

王都キサラは王府直轄だが、16州にはそれぞれ州政府があり、首長として州知事がいる。

先代キランサ国王の時代までは各地域に勢力を持つ貴族の名門から

州知事が任命されていた。しかし、現ソランサ国王の時代になると一代貴族の騎士出身、あるいは平民出身の州知事も出てきている。

立春祭に合わせ次々に上洛した16州の代表（多くは州知事であったり

州副知事であったりする）に会見するため、

自治省政務次官の予定表は過密状態になった。

16州代表はもちろん長官とも会見するが、こちらは表敬訪問という意味合いが強く、いずれも、ものの15分程で終わってしまう。

実質的な要望を受け付けるのは次官以下、局長級クラスの上級役人だ。

例えば25歳の若造でも王族出身、王の叔父、現ミルケーネ公爵である自治省政務長官キリルは、地方色の強い16州代表の中にあっても不動の地位を誇る。

対して、26歳、地方役人出身、“あのアギール家の娘”である自治省政務次官リアンは、灰汁あくの強い16州オヤジ連中を前に、ともすれば好奇の目を向けられ、ともすれば小娘となめられそうな立場であった。

隣国イサと国境を接するルーマ州及びカパラ州代表とは多少の面識があつたため、この二人とは「比較的」良好な挨拶を交わせたのだが、あとの14州代表からは、多かれ少なかれ（何で、こんな小娘が政務次官に？務まるのか、お前に）という無言のプレッシャーがかけられた。

リアンの暮らしていたルーマ州のように、地方によっては女性役人の登用に積極的な所もある。

しかし、北辺のソイ州や東辺のシアラ州、島嶼部のマツカラ州などは

女性役人を認めず、「女は家に居て、家を守るべきもの」という固定観念が依然強い地域がある。

しかも、中央官庁での女性役人の登用が始まったのはわずか3年前のこと。

それも何故か王弟ワグナ殿下が突然発案して、あれよあれよ言う間に決定したことだという。

王府の中でも女性の管理職はまだ少なく、エリート層それだけに男性官吏からの反発や戸惑いも強い。

リアンが飛び込んだのはそんなファネ国中央の官僚社会だ。

幸いにも、リアンは、自覚皆無なもの“伯爵令嬢”である。それも“アギール家令嬢”なのだ。

父クロンは時の王女に“あの人と結婚できなければ死ぬ”と言われ、母ミアンは時の王子に“あの人と結婚できなければ生涯独身を貫く”と

言わしめた。リアンはそんな父母を持つ娘なのだ。

緩く波打った金茶の髪が腰まで広がる。黄緑の瞳が煌めく。トレット

「お祭りなんですから！」と補佐官ヴァンサランと8人の側近に揃って懇願され、前夜祭のある本日は団子頭を解いている。

いつもは朝ささっと叩いて塗るだけの薄化粧も、長官の差し向けた侍女のお陰で派手にならない程度の“女優顔”に仕上がっている。

衣装は、王都行進を辞退したものの（当然だ！）、結局は

春の女神ディーテを模した薄紅と若緑の羽衣 春霞 を身につけている。

つまり、彼女がふわりと柔らかく笑めば、各州代表の口をしばし黙

らせる

くらいの美姫に現在仕上がっていた。

ヴァンサランと8人の側近は良い（グツ）仕事をしたと上司の晴れ姿に

大満足だが（執務室で綿入れを愛用する田舎娘に彼らは密かに涙していた）、

当の本人だけは、なぜに着飾る必要があるのか納得できないままだった。

ともあれ、リアンは、入れ替わりでやってくる16州代表を

その仮装？で騙しつつ、各州の近況報告やら要望やらに耳を傾けた。そして、それらの中にある「嘘」と「誠」、「何かおかしい」、

「どうでもよい」を密かに選別してゆく。

くだらない世辞や社交辞令に対しては軽く意識を飛ばして束の間の休息を得る。真面目に全部聞いていた日には神経が擦り切れるからだ。

「次官、失礼するよ」

お昼を回ったところで、珍しく長官自らが部下の執務室を訪れた。ちなみに、わずかの時間であるが、リアンが独りになることをヴァンサランから聞き、それを狙っての来訪だ。

他の8人たちは州代表の接待やら地元宣伝館の
アンテナショップ
応援やらで全員出払っている。

「リアン…？」

部屋を出た様子はないのに、姿が見えない。

念のため、隣の書庫とその隣の仮眠室を覗いたが、やはりいない。

「一体どこに…?」

何故か気配だけはあるのをいぶかしんで、キリルはもう一度
ごちゃごちゃ狭くなった次官執務室を見回した。

そして気づく。

薄紅の衣の端が机の端から食み出している。

(隠れているつもりか?)

長机の下をそっと覗き込むと、果たして薄紅と若緑の物体がなにやら
転がっている。

ミルケーネ公爵が発見したのは、僅かの休憩時間を最大利用して
熟睡する自治省政務次官の丸まった姿であった。

厚手の毛織物を寄木の床に一部敷きし、刺し縫い(キルティング)
されたクッションを

2つ3つ転がして、なかなか寝心地は悪くなさそう。

三方を袖机やら書類棚やらで囲まれているため、一度潜ってしまえば
そこに人がいるかなど、ちょっと見ただけでは分からない。

…というか、机の下で政務次官が居眠りしているなどとは誰も考え
ない。

「リアン、こんなところで寝ていないで仮眠室に…」

言いかけて止める。

彼女を抱き起こし、簡易寝台のある所まで運んでやろうと思ったの
だが…。

(これはもしや、好機か?)
チャンス

しっかり働いてくれば、ちょっとは良いことがあるとヴァンサランも
言っていたではないか。

リアンも他の自治省役人も言葉には出さないものの、キリルをグウタラ長官だと思っている。

彼らのどこか諦めた態度がそれを示している。

しかし…省内ではヴァンサラン以外知らない事実であるが、キリルとて、

“別の場所”では真面目に働いて…いることも…少しはあるのだ。

愛しの姫君はまだ目覚めない。

金茶の髪を払うと閉じた^{まぶた}瞼と唇が露わになる。

ほんの少し…触れたとしても、罰はあたらなはずだ。

王族出身とか公爵とか長官という立場はこの際、綺麗さっぱり忘れ去る。

眠っている娘に許諾なく触れるのはどうなのだという常識も一蹴する。

時間切れを恐れた青年はさっさと自らの願望実現に動いた。

が、しかし。

寸止めの事態は回避したものの、3度目の接吻^{キス}を秘かに落とそうとして、ジリリリンという喧しい音に遮られる。

「わ、何だ？」

慌てて身を起こそうとした自治省長官は、机の角にしたたか頭をぶつけて蹲^{まぐさむし}る。

「はいはい時間ですね」

もそもそと起き出した自治省次官は、頭を掻きながら、机の上に予め設定^{トセット}しておいた目覚まし時計を止めた。

背伸びを一つしてから、ぺちぺちと自分の頬を叩き、覚醒してみれ

ば。

何故か自分の前に頭を押さえたキリルが立っていた。

「あれっ？長官？どうしてこんなところに？」

「貴女に用があつて来たのですが…何で机の下で寝ているのですか？」

用とはもちろん衣装の見せ合いこであるが、それを口には出さない。

「仮眠室まで行くのも面倒で。それに狭い場所の方が落ち着くんです」

「髪がクシャクシャですよ」

自分のささやかな？悪事がバレないか、内心焦っていた長官だが、だんだん余裕を取り戻し、リアンの寝癖を直してやる。

まだ少し寝ぼけているのか、髪に触れても嫌がるそぶりはない。

額に触れ、こめかみに触れ、頬を撫でて、顎のところで手が止まる。

「…長官？」

(ここで好きだと言ったら本気にしてくれるだろうか？)

深く口付けたら応えてくれるだろうか？

強く抱きしめたら…逃げないでいてくれるだろうか？)

顎にかけた手に力を加えて、リアンの顔を持ち上げる。

キリルの顔がリアンに近づいていく。

「長官、何を…」

リアンは本能的に顔を背けようとしたが、キリルのもう一方の手がリアンの後頭部をがっちり捉えて動けない。

大貴族のお坊ちゃんんでいるようで意外に力がある。

次に来る“何か”に身構え、リアンはぎゅっと目を閉じた。

コツンと当たったのは唇と唇ではなく、額と額だった。

「リアン…少し熱いですね？」

「え…？ 暖房装置は今朝から復旧していますが、暑いですか？」

「部屋ではなく、貴女が。熱がありますね」

長官から指摘されて初めて、リアンは何となく身体がだるくて、立っているのがいつもより辛いことを自覚する。

「…風邪をひきましたね？」

キリルの声が鋭くなったのはリアンを心配するあまりからだだが、彼女はそれを叱責と受け止めた。

体調管理は基本中の基本。大失敗だ。

「申し訳ありません。こんな大事な時に」

体力には自信がある方だが、自治省泊まり込み勤務で予想以上に疲労が

溜まっていたらしい。そこに暖房装置故障と立春祭準備が重なった。

「アギール家に連絡を取って…誰かに迎えにきてもらいましょうか」

「絶対ダメです！」

そろそろ祖父か叔父か痺れを切らして、自治省に訪ねてきそうな時期なのだ。ここで具合悪くなりましたなどと連絡したら、大騒ぎになることは目に見えている。

「これから16州地^{アンテナ}元^{シヨック}宣伝館の視察が入っていますので

行つてまいります」

「…大丈夫なのですか？」

キリルは行くな休んでいろ、と言いたくて…言えなかった。リアンの仕事熱心はよく知っている。

次官が“風邪を引きました。ちよつと熱があるので”と立春祭の視察を簡単に取り止め（キャンセル）することはできない。

「この程度の風邪ならまだ大丈夫です。ご心配なく」

リアンは執務室に用意しておいた薬箱から風邪薬を取りだすと、栄養剤と

ともに飲み下した。

部下のために用意しておいたものだが、自分も使うことになるうとは、

というトホホの心境だ。

「…私に何かできることはありませんか？」

白絹の手が額に触れる。冷たくて気持ちが良い。

しかし、先日キリルから浴びせられた暴言の数々が思い出されてリアンは少し意地の悪い気持になる。

「それでは生姜茶を入れてください。

侍女に頼むのではなく、お手ずからお願ひします。

ああ、生姜はちゃんと生のものを搗すりおろしてくださいね。

粉末になったものを使うのはダメですよ」

「生姜茶ですか？」

藍の双眸に戸惑いが浮かぶのを眺めて、

リアンは自分のささやかな報復の効果に満足する。

もちろん本当に淹れてもらおうなどとは思っていない。

公爵様は生姜も大根も搗すったことなどないだろう。

卸し器に手を触れたこともないだろうし、そもそもどんな器具なのかも

知らないだろう。

何やら悩んだ様子のキリルを見るのが楽しい。

「次官殿、まもなく視察の時間ですが」

フェイトとアイルが迎えに来た。

最初の視察は彼らが担当している南辺及び島嶼部州の
アンテナショップ
地元宣伝館だ。

「リアン」

キリルが呼びとめる。

リアンは春の女神の出で立ちで彼の前に立っていた。

「では、長官、生姜茶はまた今度に。行ってまいります」
そして衣を翻した。

第四章 自治省の防衛部隊 その2（後書き）

キリルのもう一つのお仕事。

そちらは半分以上、宰相に放り投げているのですが、時々真面目に取り組んでいるようです。

もう少し後の章で、キリルのもう一つの肩書***長官が出てきます。

リアン、長官に茶を淹れるという意地悪？冗談？が言えるようになる位、

二人の距離は近づいたということでしょうか。どうでしょうかねえ。

次回、風邪っぴきの彼女が視察中に思いがけない再会をします。そして

体調最悪、心の棘が抜けないままに、リアン、本祭突入です。

予告：「リアン…君が“アギール家の娘”？自治省の政務次官？」

「…お久しぶりね、ラウザ」

第四章 自治省の防衛部隊 その3 (前書き)

字句の修正若干行いました。

リアンの父 クロス リアンの叔父(クロス弟) クロン です。
失礼しました。

また、王都 ファネ国首都キサラ。

王府 ファネ国首都キサラにある王宮と中央官庁が集中する
場所

(皇居+永田町+霞が関)という意味で使っています。

さて、リアン、 と再会する、の巻です。

第四章 自治省の防衛部隊 その3

フアネ国16州の地元宣伝館アシテナ ショップは立春祭に合わせ、王府の広場4ヶ所に4州ずつ臨時に設置された。

王府は国政の中核部分であり、国王の住まう王宮（内宮）とも直結している

ため、普段は一般の入場が厳しく制限されている。

しかし、立春祭3日間には部分が開放がなされ、王府の建物見学や16州地元宣伝館アシテナ ショップでの買物を楽しめるようになっている。

加えて、初日（前夜祭）には春呼びの行進パレード、中日（本祭）には王族一般参賀、

最終日（後夜祭）には花火大会と各日催し（イベント）が用意されている。

リアンは人混みでござった返す王府内を右へ左へと走っていた。

前夜祭の行進パレードは夕方からなのだが、既に混雑が激しい。

王府一般開放や16州地元宣伝館販売アシテナ ショップは早朝から行われるため、日の出時刻から、かなりの観光客が集まってきていた。

午後になると、行進パレードを少しでも良い場所で見ようという者たちで陣取り合戦が始まり、王府から市街にぬける主要通路が一層混雑する。

「リアン、こっちだ！」

ヴァンサランの誘導で、自治省次官は会場を次から次へと視察して回る。

まったくとんだ体力勝負だ。

地下の隠し通路が使えれば楽なのだが、王族と一部の長官級クラスにしか知らされていないもので、今は役立たない。

しかも、隠し通路のどこがどう繋がっているのか分からないので、下手に足を踏み入れれば確実に迷う。

リアンが走っているのは、一般客が通らないような業務用通路や建物と建物の隙間にあるような細道だった。

ヴァンサランはさすがにそういう抜け道をよく知っている。

まともに表通りを歩いていたら、予定の視察など半分もこなさぬうちに

時間切れとなっていただろう。

同行していたフェイとアイルは息も絶え絶えだ。

やや中年太り気味の二人だが、このところ次官による強化訓練スバ
ルタのせいで随分顔立ちが引き締まってきている。

とはいえ、もともと基礎体力は今一つのように、

互いの肩を抱きながら、やや足元をヨロヨロさせての前進だ。

「ヴァンサラン、待って」

後れた二人をしばし待つためにリアンは補佐官に声をかけた。

細道を抜けて、表通りをあと突つ切れば、そこはもう

島嶼州4州が共同で設けている地元アンテナ
ショップ宣伝館だ。

リアンは上着に重ねた薄紅と若緑の衣を直しながら呼吸を整えた。

さすがに女神装束のまま外を歩くのは寒いし…なにより恥ずかしい。

しかし、「お祭りですから！」と叫ぶ側近たちの説得を完全無視する

こともできず、折衷案として普段制服のように来ている次官服の

上に羽衣風の薄布を肩掛けのように被ることで許してもらった。

また少し熱が出ているのか、なかなか呼吸が楽にならない。

ヴァンサランの前では何事もない態度を装いつつ、

フェイやアイルには「しっかりしてよ！」と檄を飛ばしつつ、

リアン自身、実は結構しんどい状況にあった。

今のところ鼻水や咳は出ていないが、今夜あたりマズイかもしれない。
後ろの二人を確認して、リアンはぼんやりと前に一步踏み出した。
そこがもう表通りだということを失念して。

「危ないっ！」

たちまち人とぶつかりそうになり、慌てて身を捻らせて衝突を避ける。

しかし、そこは運悪く日陰のままで、溶け残っていた氷が鏡面を作っていた。

自治省次官は変な姿勢のまま足を滑らせた。

引死に伸ばした手も空を掴む。

(こんなところで生傷を作ったら間抜け過ぎる…！)

田舎者次官、王府の氷で滑る！アギール家令嬢、顔面裂傷！…などと不吉な見出しが「王都新聞」お笑い欄(本当にそういうコラムがある)に

掲載されるのを想像してしまう。

しかし、お約束か、あわや、のところで腕を取られ、がっしりとした胸に

引き寄せられる。

最初リアンは、大柄な赤毛男のヴァンサランが自分を助けてくれたのだと

思った…が違う。締まった体躯だが補佐官ほど大柄ではない。

「大丈夫ですか…？」

リアンの瞳に映ったのは、自治省の役人ではない

…けれど、どこかで見たことのある…懐かしい顔であった。

「お怪我はありませんか？」

その人はもう一度リアンの無事を確認した。

そしてお互いに記憶の中の姿と眼の前の姿を重ね合わせる。

「…リアン？どうして君？」

（ああそうだ。王府で働いているのだから、会う可能性も考えて

おくべきだったのに…）

しかし、リアンはこの再会に何ら心の準備をしていなかった。

どんな言葉を紡げば良いのか分からない。

「…どうもありがとうございます」

とりあえず助けしてくれた礼を述べる。自分でも声が硬いのがわかる。

それからまだ自分が相手の胸に抱きとめられた格好になっているのを悟って、慌てて身を離す。

ほんの束の間、寂しいという思いがこみあげる。

…相手の腕も胸も彼女はよく知ったものだったから。

「今、どうしている？王都で働いているのか？」

相手の声も硬い。戸惑いと、苛立ちを隠すかのように。

何をどう説明すれば良いのか、リアンが言い淀んでいると、

不意に赤毛の男が人混みを掻きわけて横に立った。

「リアン、大丈夫か？」

そして、追いついてきたフェイとアイルも叫び声を上げる。

「日陰はまだ凍っているの、走ると危ないと申し上げたでしょう

！」

「次官殿がここで怪我したらこの後の行事はどうなるのです！」

二人はリアンを叱ることができて少し嬉しそうだ。

「自治省の次官…？」

リアンが何か言う前に相手は悟ったようだった。

それはそうだろう。

赤毛大男のヴァンサランが自治省補佐官なのは結構有名な話で。しかも、「次官殿」と呼ばれる女性は王府官僚多しといえども目下ただ一人しかいない。

一般国民ならともかく、王府で働いている役人ならば直ぐに気づく。

「リアン：君が“アギール家の娘”？自治省の政務次官？」

「：お久しぶりね。ラウザ」

リアンはそこでようやく男の名を呼んだ。7年前に別れた恋人の名を。

(やばい、俺、殺される)

見つめ合う男女二人を横目にヴァンサランは嘆息した。
主^{あるじ}から、絶対に二人を会わせるなど厳命されていたにもかかわらず、
だ。

王府が大混雑する立春祭によりにもよって…である。

ヴァンサランはミルケーネ公爵への報告をどうすべきか一人思い悩んだ。

*** **

島嶼州4州共同地元^{アンテナ}宣伝館^{ショップ}は大盛況だった。

一応、各州の気候・風土・文化・歴史などを紹介する展示コーナーや観光相談ブースなども設けられているのだが、何と云っても人気なのは

地元製品を直売している店舗部分である

。

それも通常の3、4割引の価格設定とくれば、誰しも目の色が変わ

る。

定番の真珠貝や染織物、^{スパイス}南洋香辛料のほか、最近では海藻を使った健康食品が高齢者に化粧品が若者に注目され、飛ぶような売れ行きである。

リアンは「政務次官」という肩書を表に出さず、自治省の一役人という風情で

特設会場を歩き回った。

ヴァンサラ補佐官はそれを少し離れた所から見守っている。赤毛の大男は

有能だが、このような場所ではいささか具合が悪い。

目立つ上に、一緒に並んで歩かれると…一般客に妙な威圧感を与えてしまう。

リアンは伯爵令嬢とはいえ貴族独特の高貴な（しばし居丈高な）雰囲気

纏っていない。

彼女が一人で会場を歩きまわる分には、

街の綺麗なお嬢さん（本人の自覚はない）がお祭り気分で購入に来ている

という程度の印象しか周りに与えない。

とはいえ、自治省内の人間であれば、金茶の髪と黄緑の瞳を持つ、自分たちの若い次官を見間違えるはずはない。

「応援販売お疲れさま、化粧水の売れ行きが凄いわね！」

「会計場が長蛇の列になっているみたい。ちよつと誘導をお願い」

「真珠貝の売場に、人相悪いお兄さんたちがいるから、軍の警備兵に念のため通報しておいて」

下級役人の大部分、中級役人の半数が、祭りの3日間、販売や会場

整理、

警備などに駆り出されている。

リアンは省内の役人を見かけると気さくに声をかけながら、会場内の保安に気を配った。

国軍主導の王宮騎士団及び王府警護団が要所を固めているが、こつも人が多いと細かい所まで気を配れない。

少々の揉め事は省内から派遣した下級役人が臨時警備員として対応する

事になるが、にわか作りの防衛部隊がどこまで機能するか

…政務次官としては内心心配でたまらない。

どうもヴァンサランは別として、「腕に覚えあり」という武官っぽい文官が

自治省には少ないように思われるからだ。

幸いなところ、

タイムセールの染織手提を巡っての小母ちゃんたちの

掴み合いや、

数量限定の育毛剤（海藻成分配合）を巡っての小父ちゃんたちの取っ組み合いなどが発生しただけで、今のところ深刻な事件は起こっていない。

もつとも…以上の事件で、ご婦人1名が前歯を、1名が左腕を折る事態になり、残りの軽傷者数名とともに王府内の救護室に搬送された。

また、初老の男性10数名が残り少ない髪を互いに毛むしり合い、結果丸禿げになって国軍留置所に勾留される運びとなった。

前者も看過できないが、後者の報告を受け、リアンの頭痛は悪化する。

絶対、ワグナ殿下が嫌味を言ってきたそうだからだ。

「…次官殿、先ほどの方とお知り合いですか？」

フェイが次官に紙コップを差し出した。ミマイ州の花蜜入り香茶だ。ほんわりと花の香りがして、口に含めば喉の痛みが和らいだ。

二人は会場の目立たない場所で香茶を試飲しつつ、小休止していた。

「…どの方？」

リアンはフェイの意図が分かっている、あえて聞き返した。

「先ほど次官殿が外で滑りそうになった時に…あの、」

「…ああ、あの方」

口を濁したフェイの後を引きとる。

わざわざ訊ねてくるのは何か言いたいことがあるのだろうと察する。

「ルーマ市で下級役人をしていた頃の先輩よ。」

何年か前に中央に抜擢されて…財務省だったかしら？」

「…今は農業省に勤めています。昨年夏に異動になりました」

「農業省？また随分と変な異動ね。というか、フェイの知り合いなの？」

「」

聞くともなしにリアンは聞いてしまう。

元・彼の現在など知ってどうなるものでもないが。

しかし、財務省から農業省への異動とは珍しい。

しかも、人事異動は通常、春秋キヤリア：夏というのは滅多にない。

不思議の経歴だ…と自分を棚に上げて首を捻る。

「直接の知り合いではないのですが、彼の財務省での同期が私の友人です」

「ふーん」

「地方都市から抜擢されたということと、財務省の、とある高官の娘婿になった」ということが、まあ一時、噂になりました」

フェイの言わんとすることは分かる。

婚家の勢力を背景に地方役人から中央官僚にのし上った男、
というように感じて注目を浴びたのだろう。

「ですが、昨年離婚しました。やはり元・舅と同じ役所では双方具合が

悪かったのでしょうか。“依頼により”という体裁で異動になりました」

(つまり左遷トバされたと…何、やってんだかなー、ラウザ)

リアンの知る男は、仕事面ではもう少し狡猾であったはずだ。

「別れた奥さまとの間に女の子が一人いましたが、その子が事故で亡くなって」

「…なんか随分と詳しいわね、フェイ」

「いえ、うちの娘が通っている幼稚園にその子も一時期通っていたので…」

「ふーん」

リアンは興味なさそうに相槌を打つにとどめた。

元・彼の心配をしている余裕ヒマはない。

もっと言ってしまうえば、モトカレだと部下フェイに知られて得るところは何もない。

(それにしても王府、広いようで狭いな…気をつけよう)
事情通はどこにでもいるということだ。

ヴァンサランはその日、二度目の失敗に言葉もなかった。

自治省に戻る準備のため、ほんのちよつとリアンから眼を離れた隙に
またも彼女に要らぬ情報が吹き込まれてしまったのだ。

フェイが官庁人事(とくに家族関係や家庭事情)に詳しい高級役人
だと

いうことを失念していた…訳ではないのだが、正直油断していた。
フェイがこつも早く政務次官を“気に入って”、手持ちの情報を流
すように

なるとは予想していなかったのだ。

紙コップの香茶を飲むほんのちよつとの休憩を許したがために。

(ダメだ、俺。今夜、長官に会いたくない…まだ死にたくない)

リアンの身辺警護をくれぐれも頼みます、

リアンの具合が良くないから極力負担を軽減して補佐する^{サポート}ように、

最短で視察を終えて自治省に戻ってくるように、

そして

何をおいても彼女に近寄る害虫を一匹残らず撃退するように!!!
などなど厳命されていたにもかかわらず。

(ルーマ市で恋人だったラウザ君に会っちゃいました)

(彼が離婚して、ただ今^{フリー}独身ということもバレちゃいました)

てへつと笑って誤魔化せない事態である。

フェイを闇討ちしても許してもらえないだろう。

熱が上がって足元がふらつき始めた次官に手を貸しながら、自治省
への

帰途につく。

もはや二人とも本日の^{メインイベント}行列行進など頭になかった。

リアンはどうしたらあと二日乗り切れるか、

ヴァンサランはどうしたら今夜を生き延びられるか、

それぞれ真剣に考えていたのである。

第四章 自治省の防衛部隊 その3（後書き）

防衛部隊編、まだもう少し続きます。

自治省の防衛部隊、小母ちゃんやら小父ちゃんやらの喧嘩を仲裁して地味に活躍中です。

次回は真夜中の出来事 + 本祭での出来事編。

キリルが嫉妬にかられて××× ベリルが黄緑の瞳に××× お楽しみに。

第四章 自治省の防衛部隊 その4（前書き）

今回は、ベリル、フローネ、イエイル（初登場！リアン従弟）と次々と出てきます。

そしてもちろん、自治省長官キリルも。

第四章 自治省の防衛部隊 その4

自治省政務次官執務室に附属して設けられた仮眠室。リアンは簡易寝台の上にぐったりと倒れ伏していた。

暖房装置は復旧以来、順調に稼働している。

それでも酷い悪寒に襲われ、リアンは備品の毛布の上にアギール家から差し入れられた羽毛布団を被って震えていた。食欲は全くなく、

夕食は勿論、果物にすら手をつけることができない状態だ。

全くとんだ一日だった…

アンテナショップ 地元宣伝館視察から自治省に戻った後、

(ほんのちよつとくらいはバルコニーから行進見物パレードできるかな) などと考える時間すらなかった。

旧カリン宮は1階と2階部分を立春祭に合わせて一般公開していた。東棟の自治省、中央棟の商務省、西棟の工部省と3省が協同で、見物客への説明や誘導、警備を行っている。

ここでも下級役人の大部分と中級役人の半数ほどが活躍する。

客は、正直なところ、3省の成り立ちだの職務内容だのにほとんど興味を持っていない。

ただし、旧カリン宮の建物自体は2000年近い歴史を持つものであり、

かつては王の寵妃が居所としていた時期もあって、外装・内装ともなかなか立派な所が残されている。

立春祭に際して、“ついでに”旧カリン宮も見物しておこうと思う者は

そこそこの人数いる（混雑のため入場制限が必要というほどではないが）。

しろうと防衛部隊に一抹の不安を感じていたりアンであったが、果たして悪い予感には当たってしまった。

自治省に戻ってきて、政務次官自ら、

その1 宮殿裏の死角で痴漢行為に及ぼうとしていた若者2名

その2 花街から出張奉仕^{サービス}にやってきた、綺麗なお姐さん3名、

その3 宮殿内の壁から金箔を剥ぎ取るうとしたお婆さん1名、

その4 立ち入り禁止区域で何やら挙動不審な中年男1名を、ひっ捕まえることになった。

他の役人が見落として（中には、見逃して？）いた者たちで、いずれも国軍留置所送りとした。

案の上、王弟自らが自治政務次官室に怒鳴りこんできた。

「小娘っ、この忙しい時にちんけな犯罪者をわざわざ軍に送って

寄越すな！ただでさえ留置所が混み合っているんだ！」

ベリルの怒りも言われなきことではない。

国軍が立春祭で警戒しているのは、要人暗殺や破壊活動^{テロ}、諜報活動^{スパイ}である。

間違っても、金箔を木べらで削り落して盗み取るうとする高齡者^{おばあちゃん}ではない。

が、またもリアンはファネ国軍大将に反抗してしまった。

「そんなこと言っちゃって、内務省の留置所に空きがないんだから仕方ないでしょう！けちけち言わないで、1日2日預かってくださいっ」

「祭りに多少の危険はつきものだ。小者は見逃せ。」

「ワグナ殿下…確実に被害が出ると分かっている見逃せません」

「どこまで生意気な口をきく気だ！」

ああ頭が痛い、喉が痛い、リアンは意識が飛びそうになりながらも必死に言いつのろうとした。熱のためか、目元が潤んでくる。

冷静を保とうとしているのに上手くいかなくて、声が甲高くなる。「嫌味を言いにくる暇があるのなら、さっさと軍に戻ってお仕事

してください。それから、留置所に押し込めている人たちの状況もきちんと確認してください。暖房もケチらずにお願いします。」

地下牢に放置しておくのと凍死の危険性もありますから。

とくに高齢者と薄着のお姐さん方には気をつけてあげてください」

「だから余計な手間を増やすなと……！」

今度こそ打たれると、リアンは覚悟した。

それも仕方ないと、黄緑の瞳を閉じたりせず、相手を見つめる。

恐怖は感じられなかったが、自分の下手な采配が情けなく、束の間泣きたい気持ちになる。

「……まあ良い。今夜のところは貸しにしておこう」

緊迫したのは数瞬で、驚いたことにベリルは振り上げた手を下ろしていた。

国軍大將はなぜか突然、戦意を喪失したようであった。

(……どういうこと?)

入ってきた時同様、突然去ってゆくベリルの後ろ姿を見て、リアンはあっけにとられた。

しかし、心の平安はまだ訪れなかった。

王弟殿下と入れ違いに、その姪フローネが憤然として現れたのである。

亡き母親は現国王ソランサの姉であり、自身は名門フッサール伯爵家の夫人。

高貴な立場……でありながら、リアンに対する時は憤みも威厳も忘れて、

感情が前面に出るようだ。

「よつやく会えたわ！」

次官のくせにウロチヨロ出歩いているものじゃなくってよ！

本祭の件で王妃様からの伝言を持って来ました。有り難く思いなさい」

もの凄く上から目線である。

「…慎んで承りまうけたまわしょう」

リアンは反論する気力なく、フローネから書簡を受け取った。

「一般参賀の後に、王宮内で総披露があります。

王妃様からお声がかかるから、そのつもりでいなさい。

疲れた顔や辛気臭い顔を見せないで、きちんと正装すること。

分かっていると思うけど、この間のお茶会のように貧乏くさい格好は

やめて頂戴ね」

貧乏くさいって、次官の普段用・執務服なのですが…という文句も口の中で飲み込む。ただただ、眼前の要注意人物その1に早く帰ってもらいたかった。

「それで衣装のことなのだけど…」

「それでしたらご心配なく。キリル長官から既にご指示いただいて準備

してあります」

ここで衣装がどうの、髪型がどうのと始まったらリアンは発狂する。切り札とばかりにミルケーネ公爵の名を出して、フローネを遮った。

「…そう。わたくしの説明など不要という訳ね」

もちろん王妃付女官は機嫌を悪くした。が、構っていられない。

「フローネ様におかれましては立春祭でご多忙のところ、お気づかいいただきまして有難うございました」

この口上の真意は“早く帰れ、バーカ”である。

もちろんフローネは正しくリアンの意図を理解した。

「お邪魔しましたわ」

怒りに顔を朱に染めて、フツサール伯爵夫人は退室した。

(とにかく、ひと眠りしなくちゃ…)

しかし、もはや安眠できるような健康状態ではなくなってきた。
再び風邪薬と栄養剤のお世話になる。

栄養剤で嘔せているところに、やって来たのはアギール家からの
使いであった。いつもの差し入れを届けてくれる召使ではない。

「姉上。ハリド様が屋敷で暴れています。一体いつになったら帰って
きてくれるのですか!」

「…イエイル、あんたまで来たの?」

「姉上が自治省に行つたまま戻つてこないの、ハリド様に泣き
つかれました」

「騎士団も忙しい時なのに申し訳ないわね」

リアンを姉と呼ぶのは王宮騎士団に勤めるイエイルである。
むろん本当の弟ではない。

訳あって“アギール”を名乗っていないが

叔父クロンの息子で、リアンにとっては従弟イトコにあたる。

「それより、次官つて…何です?」

アギール家では次官付の事務役人になられたと聞いていましたが
昨年騎士になつたばかりのイエイルはまだ17歳である。

しかし、簡単には騙されてくれなかったようだ。

「ごめん、イエイル。説明すると長くなるから、今は見逃して」

「…分かりました。明日の総披露にはアギール伯爵もシャイン子爵も
参列しますので、その時にでも“言い訳”してください」

従姉が披露の色を滲ましているのを見て、イエイルはそれ以上
追及しなかった。どうせ明日にはもう一度会うことになるのだ。

久しぶりに“アギール家”一同が揃うということを伝えられれば十
分だ。

…そんな訳で、リアンが仮眠室に倒れ込んだ時には深夜を回っていた。
なぜかヴァンサラ補佐官が行方不明になっていたが、彼がふいと姿を消すのは珍しくないのです、気にしないことにする。

それよりも明日に備えて気力体力を大至急回復させることが至上命題だ。

明日の午前中はまた地元アンテナショップ宣伝館視察があるし、午後には一般参賀とそれに続く総披露がある。

王妃から直々に声がかかるとなれば最前列に立たねばならず…つまりは後ろで壁にもたれて居眠りする訳にはいかない。

加えて、祖父も叔父も参列するとなると“あのアギール家”で注目を浴びるのは確実だ。

「勘弁してくれ…」
死ぬほど疲れているのに、身体がしんどくて、眠ることができない。ところどころに意識が飛ぶのだが、黒い霧の中を彷徨つようである憂鬱になる。

悪寒の後には身体が燃えるように熱くなって、リアンはだんだんと自分がどこに居るのか分からなくなっていった。

「リアン、生きていますか？」

その声で、意識がふわりと持ち上がる。

目を開ければ藍色の双眸が心配そうに自分を見ている。

白絹の手がリアンの頬に触れていた。

「…長官」

リアンは寝台から慌てて身を起そうとしたが、やんわりと押しとどめられた。わずかに動いただけで骨がキシキシと痛んだ。

「無理をして。視察など適当にやればよいものを」
出た、グウタラ長官発言。

しかし、今のリアンに反論する気力はない。

フローネを封じたあたりで最後の力を使い果たしてしまっていた。

「生姜湯を持ってきましたよ。起きられますか？」

「え…？」

「ちゃんと公爵家から生生姜なまを取り寄せました。

わたしが手ずから摺りおろしたものですから、よもや飲めないな
どと

言いませんよね」

「え…？」

リアンは言われたことが理解できないまま、もう一度身を起そうと
した。

今度は背中に手を回され優しく抱き起こされる。

「長官：生姜湯、作っただんですか？」

「一生懸命お仕事している次官のために作りましたよ。

人生で初めて下ろし器なるものを使いました」

「それは貴重な体験を…いえいえ、ありがとうございます。いただ
きます」

長官から湯気の立ったマグカップを受け取り、ゆっくりと口に含む。

生姜の辛みと蜂蜜の甘みが喉に浸透していく。美味しい。

そしてなぜか涙が出そうになった。

「…次官になど指名するものではなかったですね。

これほど無茶をすると分かっていれば」

「別に無茶していません。全ては暖房装置が故障したせいです」

「…痴漢を蹴りとばしたり、不審者をお縄にしたりするのは

無茶ではないと？なぜ警備兵を呼ばなかったのですか」
ヴァンサランから報告がいったのか。しかし、捕り物の時、補佐官は
いなかったはずだ。

「政務次官として貴女は自分の身体に責任を持つ必要があるのです
よ。」

簡単に病気になったり負傷したりする訳にはゆきません」
生姜湯をちびちび飲む間、キリルの説教が続いた。

早く飲みほして長官にお引き取り願いたいのだが、そうするには湯が
熱すぎて、しかも生姜が辛すぎて（一体どれくらい入れたのだ）
儘ならない。

「だいたい貴女は…そもそも伯爵令嬢が…政務次官としては…」
キリルの声がだんだんと途切れ途切れに聞こえてくる。
生姜湯がほどよく作用して、眠気が寄せてきたのだ。

「…しかも、昔の男に再会とは。
ヴァンサランには徹夜で死ぬほど働いてもらいます。あの役立た
ず。」

それで、どうなんです、会って何か感じたんですか？

…懐かしいとか恋しいとか」

半分眠りの沼にはまりこんだまま、

何故かリアンは長官からの謎の訊問を受けていた。

「懐かしいとか、恋しいとか？」

「そう感じたんですか、リアン！」

空になったマグカップが手元から消えた。

いつの間にか上半身を預けるような形で抱き寄せられている。
キリルの焦ったような、苛立つような声が耳元で響く。

「…長官、私は眠いです」

「眠りたければ正直に白状しなさい」

キリルの両腕にくっつき力がこもり、リアンは抱き潰されそうになった。

骨が痛い。半端なく痛い。何の拷問かと思う。

「元・彼に関わっている余裕ヒユはない、というのが正直な感想です」

「え…？」

今度は長官が尋ね返す番であった。

「懐かしくも恋しくもありません。

強いていえば、こんなにも淡泊な自分自身が少し…寂しい？でしょうか」

「それは、つまり…？」

キリルの手から力が抜けた。すかさずリアンは身を離す。

（私は今、他に好きな人がいます！私が好きなのは貴方よ、キリル）

というような展開をミルケーネ公爵は期待していたのだが、代わりに彼が得たものは。

「ついでに申し上げますと、長官の摩訶不思議な訊問に関わっている余裕も、今の私には全くありません。

お休みなさいませ。生姜茶をご馳走さまでした」

言うなり彼女は羽毛布団を頭から被り、長官に背を向けたのである。

「リアン、待ちなさい…許しませんよ」

少しばかり冷静でなくっている公爵サマは布団の上からリアンを押さえこんだ。

そこで相手の抵抗を予想したが、お姫サマはくたたりとしたまま動かない。

「リアン…？」

自治省政務次官は完全に意識を手放しているようだった。
どうやら生姜湯に混ぜておいた眠り薬が効いたらしい。
キリルは舌打ち一つして、そのままリアンの傍らに身を横たえた。
もちろん朝まで添い寝するつもりである。

第四章 自治省の防衛部隊 その4（後書き）

ベリル、急に戦意喪失には理由があります。

キリル、公爵サマが生姜をすっているのを想像すると笑えます。

登場人物と呼称が随分増えてきましたので、近々「人物紹介」を掲載したいと思います。

さて、自治省の防衛部隊、あともう1話続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9340z/>

自治省の悪臣

2012年1月13日03時21分発行